

おわりに 出合いに感謝して ～一つ一つの授業の込めた願い～

1 藍住中学校・文部省指定同和教育研究発表会「水平社宣言」の学習

授業をビデオに撮り、その授業記録を掘り起こす作業、そのことを始めてやったのが、1986年に藍住中学校で取り組まれた文部省指定同和教育研究発表会での公開授業であった。その授業記録は、1986年度の徳島県教育委員会の指導資料の中に載せられたが、私自身の冊子としては初めて（授業記録・60頁）掲載することができた。その授業は森口雅彦先生が、当時は今ほどビデオカメラもコンパクトではなかった状況で、重量感のあるビデオカメラを抱えて1時間の授業を撮ってくれた。森口雅彦先生の誠意が本当にありがたかった。あのビデオテープは授業を記録にしていくスタートとなった。

その授業は「水平社宣言」の授業であった。その授業に向けてのさまざまな営み、当時共に取り組んだ石原先生に連れられ、阿部先生や小笠原先生たちと佐藤文彦先生のお宅で先生からご指導いただいたことが、今も私にとって大きなエネルギーとなっている。夜遅く家路につくときの充実感、早く生徒にこの感動を伝えたいという思いになっていた。

この「水平社宣言」の学習、そのときにまとめた記録がある。それは文部省指定同和教育研究発表会の分科会で発表した内容である。それは「人間としての生き方を考える教育の営み」として発表したものである。

※ ※ ※

「人間としての生き方を考える教育の営み」—藍住中学校での同和教育の実践—

(1) はじめに

現在藍住中学校3学年には、330名程の生徒がいるが、その中で対象地域の生徒はわずか3名である。その3名の子どもたちとのかかわりと、私が今考えていることを話させてもらう。

子どもと共に部落問題を学習していくとき、「差別はいけない」「差別は人をだめにしていく」などと私たちは観念で言う、理屈を話す。子どもはそんなことはやっぱり聞いている、小学校の頃からやっぱり聞かされている。そんな中でも、子どもたちの中には、部落に対する非常に悪いイメージがある。特に藍住の子どもたちには、周りの町を差別していく、もの見方がとても厳しく存在する。藍住に来て4年目になるが、私たちが思いもしないことを子どもたちが知っているし、言っている。また親たちが陰で話している。そのことを聞くにつけ、本当に歯がゆい思いをしながら、つらい思いをしながら、まだまだやなあ、頑張らなあかんあという気持ちで頑張っている。

部落問題を子どもたちに語っていくということは、教師自身が部落問題とどうかかわってきたかということ明らかにしていく。教師自身の中にある部落差別という概念と、部落というイメージを洗い直していくことを抜きにして、子どもに部落問題を語ることはできないと思う。同和教育は人間の生き方の問題である。教師自身が部落問題にかかわってどう生きようとしたか、どう生きているのか。そのことを自分自身に問い直していく。教師が生きて来た何十年かの歴史を洗う。その中で、部落というものをどのように意識し、自分の人生の中で、部落差別というものがどういうものであったのか。そのことを自らに問うことなしに、子どもに差別はいけないと説

教するだけではなんの解決にもならない。このことを多くの先生方にわかってほしい。

部落差別の悲しみとは、人間の悲しみである。差別の悲しみということを経験した教師自らの思いの中に、しっかりと受けとめ、自分がかつてどうであったか。自分が部落とかかわってどう生きてきたか。そのことを考えることなく、子どもに本当の意味で部落問題を語ることはできない。教師が部落に対する自らの歴史を語ることは、自分の部落に対するイメージが変わってきた、部落差別に対する考え方が変わってきた、自分が解放された、その事実を子どもに語っていくということである。そこから、部落問題の学習が始まっていくと思う。

今、毎日の暮らしが8時に教室へ行くことで始まる。子どもとの8時の出会で始まる。子どもと共に朝の自習の時間に25分ぐらいの時を過ごす。子どもがドリルをする。そのときに、私たちは、子どもをどのように見ているか。子どもに対してどのような言葉をかけているか。朝起きた時に子どものことを思い描く。そして、学校に来る。学校へ来た時に、子どもの顔を見てどのような気持ちであいさつをするか、どんな言葉をかけるか。また、どんな目で子どもを見ていくか。それは部落問題を子どもと共に学習していく上で最も重要な柱であると考え。一日一日の出会、一日一日の8時の出会の繰り返し、子どもと私たちの間に暖かい関係をつくっていく。また、授業の中だけでなく授業以外の時間、朝の学活、帰りの学活、休み時間、給食の時間などの隙間の時間をどう子どもとかかわっていくかが、部落問題を考える土台になると考える。隙間の時間を通して子どもと共に生きることを考える。まず、教師と子どもが、生きることを考えるという土台がなくて、本当の意味での部落問題の学習は存在しないと思う。教師と子どもとの間に暖かい関係が維持されて、初めて部落問題を考えることができるようになると思う。

部落問題は子どもに教えるから勉強するのではない。教材研究のために勉強していくのでもない。部落問題を語りながら、人間を尊敬する、子どもを尊敬する教育の道を考えていかなければならないと思う。部落問題の学習は、まさしく、教師自身が本当の人間になるための教育であると考え。私たちは部落問題を語り、水平社宣言を読み合う中で、人間を尊敬する教育を考えてきた。

(2) 1年間の取り組みを通して

社会科の教師として、江戸時代末期、渋染一揆という歴史的事実を学習する。この渋染一揆という出来事を単なる歴史的事実として、とらえさせるのではなく、自分の生き方とかかわって考えていく、そんな授業をしたいと思い続けてきた。そんな時に「渋染一揆」(109頁)という物語に出会った。私は、それを読んだとき、人として許せないという怒りと、何とも言えない清々しい感動で胸がいっぱいになった。冒頭の文章は今も心に響いている。

「人のために生きた人は、人のために立派なことをした人は、死んで体が腐って土になっても、その名前だけは、いつまでも残っている」

幕末に、虐げられてきた人々が、しっかりとした文字で書き残した事実である。この事実に触れた時なんともいえない感動があった。12人もの人たちが牢獄に入れられているのだが、その中で体が弱って「ああ、自分は死ぬなあ」と思った時、自分の食べ物を他の人たちに回し「お前が生きてくれ、お前が生きてくれ」と支え合ってきた。そのような生きざまに人間のすばらしさを、また、苦しみや悲しさの中に培われた人間の真の優しさと強さを痛切に感じさせてくれた。渋染一揆は、私に人間として生き抜くという力と勇気を与えてくれた。そんな私の思いをじっくり

りと時間をかけ、生徒一人一人に語りかけた。翌日の生活ノートの子どもたちの反応には、驚いた。

「渋染一揆を読んでいると、『兎の眼』を思い出します。人間が美しくあるための抵抗の精神を部落の人々は、持っていたのだと思います。苦しみながら生きてきた人々の強さや美しさに勝るものはないと思ったりします。」

今、読んだ中に出てきた「人間が美しくあるための抵抗の精神」という言葉。私は、この言葉に圧倒されてしまった。なぜ、子どもからこんな言葉が出てくるのか。なぜ、子どもがこんな文章をかくことができるのか。生徒はすばらしい感性を持っている。私は、そんな生徒一人一人と共に生きることを学び、共に成長していきたいと思った。この「渋染一揆」の学習を通して、子どもに教えるとか、子どものために教えるのだということが、いかに傲慢であるかがわかってきた。子どもと共に学ぶ。子どもの中から学ぶ。そんな思いの中から、本当の教育が生まれると信じる。

「人間が美しくあるための抵抗の精神。」

はたして、この言葉をどれだけの教師が知っているだろうか。この言葉は、灰谷健次郎の著わした「兎の眼」に出て来る一節だ。「渋染一揆」にかかわって「兎の眼」の文章を抜き出してきた生徒のすばらしさの中から、生徒の中に秘められた輝きを見つけだすことができたとと思う。私はこの言葉に胸がいっぱいになって、何度も何度もその生活ノートを読み直した。今も、生きることに意味を子どもたちに問うとき、私の胸には、この言葉が響いている。この言葉を私の心に沸き起こってくる思いといっしょに、クラスの生徒一人一人に訴えていった。生徒にとって、「渋染一揆」との出会いは、私が「渋染一揆」と出会った思いと、まったく同じだったと思う。それは、私の熱い思い、自分の胸がいっぱいになって涙が溢れそうになった思い、また、人間の強さや優しさを痛切に感じ誇らしくなった思いを訴え続けたからだ。教師と生徒が、感動を通わす。それが「渋染一揆」の学習であったと思う。「渋染一揆」に出会って子どもたちは、今まで見えなかったことが見えてきた。今まで分らなかったことが分ってきた。そんな子どもたちの姿が、私には手に取るように見えてきた。「渋染一揆」の出会いは子どもを変えた。



「善財童子」



「渋染一揆」の学習に取り組んだ藍住中学校2年7組
(於 長崎平和公園)

何か学校で行事がある。学校行事のたびに子どもから、こんな言葉が出る。「8000人の人が、あれだけ団結した。この事実を知って、私たちは、私たちのクラス40人を精一杯団結させていく。頑張っていく。渋染一揆を励みに頑張っていく。」そんな言葉が、いろいろな行事と取り組んでいく中で、いつも子どもの中から出てきた。団結の強さ、連帯していくことのすばらしさを、生徒に植付けてくれたのは、まさに「渋染一揆」の学習だった。この「渋染一揆」の学習から「兎の眼」を読むことが、クラス全体に広がっていった。さまざまな資料を子どもと共に学ぶ時、「兎の眼」の中の一つ一つの言葉が子どもの中から出てきた。そして、クラスの中の大半の子どもが「兎の眼」を読んでいた。「私の目を見て！」という教材を学習した時に、子どもがこんな生活ノートをかいてきた。「先日読んだ『兎の眼』の文章の一つ一つが目がちらついてくる。勝子が『私の目を見て！』と言った。あの眼は、まさしく兎の眼であり、バクじいさんの眼であり、善財童子の眼であると思う。それはまさしく本当のことが見える眼であると思う。」

子どもたちは、こんな言葉を私に訴えてきた。私も「兎の眼」を繰り返し繰り返し読み返し、生活ノートに精一杯の返事を書いていった。「兎の眼」の一つ一つの文章の語りあいが毎日の学級活動の中で行われていった。また、ある子どもは、部落問題の学習によせて次のように書いてきた。

《「兎の眼」の中で、足立先生がこう言った。「今の人は、みんな人の生命を食べて生きている。戦争で死んだ人の生命を食べて生きている。戦争に反対して殺された人の生命を食べて生きている。平気で生命を食べて生きている人がいる。苦しうに生命を食べている人がいる。」私も人の生命を食べて生きている。苦しうに食べているのだろうか。平気で食べているのだろうか。苦しうなふりをしているだけかもしれない。今、私たちが部落問題を真剣に考えなければ、平気で人の生命を食べている、平気で人の心を殺す人間になってしまう。それは、絶対にいやだ。》

私は、こんな生徒一人一人の言葉をクラス全体に問いかけていった。私自身「兎の眼」が大好きになり、一度善財童子を見たいと思うようになった。1月、社会科の臨地研修で京都へ行った。その翌日の15日、非常に寒い日だったが、学校が休みだったので、奈良の方へ脚をのぼした。そして、奈良の西大寺へ行った。行きたくてたまらなくていった。西大寺の本堂に入るとき胸がどきどきしてきた。その時の気持ちは昨日のここのように鮮やかに覚えている。西大寺の本堂の中にある善財童子、それが「兎の眼」である。その眼を見たとき涙が出そうになり、体が震えてきた。仏像の眼の輝きを見たとき、生徒一人一人のことが思い出されて、体の中から熱いものがこみ上げてきて体が震えた。本当に来てよかったと思った。その眼は、障子の陰から光があたったとき、赤っぽく輝いた。それは、まさしく兎の眼であった。そこを管理されている年配の方と、善財童子について、1時間程話をした。寒い中であつたが、話をいろいろと聞かせてもらった。その眼の輝きは、忘れることができない。その翌日、私の中に沸き起こった熱い思いを生徒一人一人に語っていった。そんな取り組みの中で、私と生徒の間に、また、生徒同志の間に、ほのぼのとした温かいつながりが生まれてきた。今までなら、絶対に言えない、そんなことが語り合える。そんな学級集団が育っていった。

そのとき、私のクラスには、母がない、父には仕事がない。したがって、集金日にお金を持ってこれたことがない。それでも明るく学校へくる生徒がいた。その子が1年のとき、「来年この子を担任できたらなあ」と思っていた。そのときは、社会科の授業だけのかかわりだったが、社会科の時間は、その子に「何か感動が与えられたらなあ、胸がいっぱいになってくれたらなあ」と、その子の喜びを願って授業をしていった。その子の笑顔が、そのニコツとした顔が、私の励

みであった。集金日、お金をもってこれない、必ず職員室へ来て、その時の担任の先生に言っていた。「先生、何日が、父ちゃんの給料日やから、何日まで待つてよ」と、彼女はそれを笑顔で言う。なぜこのことがこんなに明るく言えるのかと思った。その明るい声が忘れられない。

しかし、その給料日にお金が入るかという、まったく入らない月もあった。それでも明るく学校へ来る。職員室へ来て担任の先生に「父ちゃん、給料なかったけんもうちょっと待つてよ」と言ってくる。その姿を見るたび私の心は痛んだ。私は、そんな中でも精一杯明るく生きる姿に応えていきたいと思った。私は、その子の笑顔が、その子の姿が、好きで好きでたまらなかった。その子が学校を休まずに来てくれるということが、私が教師として、頑張っていく大きな力となった。私たちは、子どもとかかわっていくとき「お前のこの部分は好きだけど、この部分は嫌いだ……」ということをよく口にする。そのことは本当に子どもを愛したことにはならないと思う。子どもを本当に大切にしていくということは、子どもを丸ごと愛することと思う。子どもが問題行動を起こした時、「それでも、お前が好きだ。だから頑張ってほしい。よくなってほしい」と願いを子どもに訴えていく。そんな思いが、また、そのように子どもを見つめるそんな眼がなければ、子どもを愛したとは言えないし、それは本当に子どもにかかわった姿ではないと思う。

1学期の終わり、クラスの仲間に別れをいう間もなく、A子は藍住中学校を去っていった。ある一つのことを通して、完全に家庭がぐずれ去ってしまい、ある施設で生活するようになった。藍住から逃げるように出ていったA子をクラスの仲間に会わせてやりたい、そして別れの言葉を言わせてやりたいと思った。しかし、それすらできない突然の別れだった。私はA子のいなくなった教室で、A子の生活ノートをクラスの子どもたちに読み聞かせた。

「先生が教えてくれた会者定離という話、とても感動しました。私は、人間としてとても大切なことを教えてもらったように思います。またつらいことがあっても頑張ります。はっきり言って死のうと思ったこともありましたが。でもその時、いい友達や先生がいたから、助かったんだと思います。これからもどうか見捨てずに相談にのってください。最後に私は人間として立派なことがしたい。」

A子が死にたいというのは、他の子が一時的な感情で死にたいというのと意味が違う。その事実をありのままに話した。子どもたちの中に人間とは何であるか、生きるとはどういうことなのか、すなわち、生きることを考える学習の下地ができていて、A子の悲しみを自らの悲しみととらえてくれる子どもたちが育っていると信じたから話すことができた。それは部落問題にかかわる学習、すなわち、本当の人間を見つめていく、人間の生き方を考えていく教育の営みがあったから話すことができたと思う。その時クラスのほとんどの仲間たちが、ぐっと奥歯を噛んで涙をこぼした。その翌日、「Aさんは、私と同じ年なのに、人生の重みを知っている。私たちは、彼女から大切なものを学んだ。今まで彼女の本当の姿が見えなかった自分が恥ずかしい。」と大半の子どもが生活ノートに書いて来た。悲しく、苦しい暮らしに生きるA子のことを、クラスの一人一人に話すことができたのは、人間の生き方を考える、生きることを考える部落問題の学習があったからだと思う。それ以後、子どもたちの間では、「苦しみや悲しみを持った人こそ、人間の優しさが分り、本当の生き方が分る。そんな人たちから私たちは学んでいかなければならない」という言葉がいつもいつもつぶやかれていた。

(3) 学習会の子どもたちと共に

さきほども言ったように、対象地域の子どもは3人である。3人であるということがどんなに厳しいことか、少数であるが故の悲しさ苦しきというものは、私たちが共に背負い、共に苦しんでいかなければならない。わずか3人であるのに、その3人はつい最近までバラバラにされてきた。3人が、部落問題の苦しみや悲しみを語り合うことはなかった。学習会にいても、学習会で今年になるまで、部落問題の学習は一つもなかった。部落の親たちは、自分たちが部落差別の苦しみをつらいつらいと言わなくても、みんなで分り合っているから口にしない、みんなお互いに分っているから語り合うことはない。そんな中で生きてきた3人、その3人が部落問題を語り合うようになってきた。部落の親たちの言う「さわってくれるな、言うてくれるな」と言う言葉に甘えて私たちは、取り組もうとしなかった。そのために放置されてきた3人だった。その3人が、お互いのつらい思いを苦しい気持ちを語り合い、励まし合い、頑張っけて生き抜こうとする展望を持つようになってきた。

しかし、1学期、放置されてきたために3人の中にさまざまな犠牲があった。問題行動があった時に、その一つの悪いことを責め、その子のすべての可能性を奪おうとした社会意識があった。一つの問題行動を責め、責任を取らすために「野球の試合に出すな」という。その子にとって野球が何であるか、そんなことはなにも考えずただ責任を取れと言う。そんな社会意識があった。私たちはそんな社会意識に、精一杯抵抗していった。生きる望みがその子にとって、何であるか、そのことを奪ったら何が残るか、頑張れ頑張れと励ましながら、野球の試合に送りだした。県の総合体育大会の決勝戦まで進んだ、試合の後の「先生、応援に来てくれてありがとう」というさわやかな声は忘れない。野球の試合で頑張ることが、彼を立ち直らせる大きな力になったと信じている。

私たちは、問題を抱えさせられて苦しんでいる子どもをどのようにみているだろうか。悪い生徒、仕方がない生徒、そんな見方しかない。問題を持たされた、問題を抱えさせられたとは、小さい頃から人権を侵害されてきた子どもの姿である。普通に大きくなったら、そんなことはなかった。どこかで、変な力が入って、人権を侵害されて、それが問題行動となって出てきた。そんな中で子どもに責任を取れという。その子どもたちの人権を侵害してきたすべての大人たちの責任はどうなるのか。その責任を感じないものが、子どもの手足を子どもの可能性をもぎ取っていく。人権を侵害されてきた子どもたちだという認識の上に立って、子どもたちに謝りながら、子どもたちが自らの力で生きていく力をつけていく。それが教育であると思う。それが教師の愛であり、優しさであると思う。教育とは、子どもを優しく包み、人間として生き抜く力をつけていく。それが教育であると思う。3人では荷が重すぎる、だから共にその荷物を背負いたい。それが私の願いだ。藍住の学習会の中でお互いが、部落問題を語り出したのは、初めてのことだ。3人が苦しみを語り合い、連帯していく中でよくなってきた。この3人の和をもっともっと広げていきたい。そして教育に「水平社宣言」をもっともっと生かしていきたいと思う。

まだまだ不十分であり、まだまだ子どもに謝っていかなければならないことがいっぱいある。私は、部落問題を自分の生き方として、子どもたちと精一杯手を取りあい生きることの意味を考えながら、共に歩いていく。

※

※

※

本当になつかしい文章である。あれから10年近くの歳月が流れている。今もあのときの生徒

のことを思うと胸が熱くなる。中学生の豊かな感性、ひたむきな生き方、この教育の営みは共に人間として解放されていく営みだと思う。

この「水平社宣言」の授業に取り組んだ生徒が、成人を迎えた日、成人式を終えた姿で、4人の生徒がわが家を訪れた。毎年のように顔を見せいろいろな思いを話していた生徒たちであるが、成人式の日となると当時のさまざまな思いが込み上げる。今までのことが熱いものとなってよみがえってくる。一つ一つの出来事が懐かしい。つい昨日のことも思い出して来る。すっかり大人になった顔立ちの中に、中学時代と同じ表情が浮かび上がってくる。「この子らの笑顔に支えられて毎日の教育実践を頑張ることができたんだ」と当時のことがしみじみと思い出されてくる。

思い出話に花が咲く中で一人の生徒が、「先生、文部同研のビデオあるでしょう。20歳になったら見せてやると言っていたビデオ……」と語り、話題は「水平社宣言」の授業、文部省指定同和教育研究発表会の授業のことに移る。この授業記録(60頁)は、今も大切にその一つ一つを読み返すことがたびたびある。しかし、そのビデオを見るのは、私にとっても何年ぶりかであった。テレビの画面に、1986年11月13日の教室、生徒の姿、そして当時の私の姿が映し出される。これでもかこれでもかと私の思いがぶつけられる。顔から火が出るぐらい恥ずかしくなる授業だ。私自身顔を赤くしながらも、私はその授業の一こま一こまに思いをはせながら、目を輝かせて一生懸命画面を追う生徒の姿に胸が熱くなった。

ビデオを見ている20歳の生徒、当時の発言の場面が映し出され、心の中に当時のことが、いっぱいよみがえってきたのだろう。とたんに目に涙がいっぱいたまってくる。その涙でキラキラ輝いた眼差しを見たとき、授業を記録に残せたことが嬉しくてならなかった。

記録に残すこと、それは時代を越えて、歳月を越えて、さわやかな感動に浸ることができる。今も全体学習の一つ一つをビデオに収めているのは、そんな願いが込められているように思えてくる。

2 瀬戸中学校での営み ～授業「瀬戸のかじこ」と佐藤文彦先生～

瀬戸中学校での3年間、その中で繰り返し繰り返し実践してきた「瀬戸のかじこ」(栗栖良夫)の授業、私はこの授業に大きな思い出がある。瀬戸中学校では、2年間、道徳教育主任として、文部省指定の道徳教育の研究推進にかかわってきた。その中で道徳の授業に対する見方が、自分なりに確立されてきたように思う。道徳の授業や「瀬戸のかじこ」の授業、そのよろこびと佐藤文彦先生について綴った記録である。

※

※

※

私にとって道徳の授業とは、人間としての生き方、あり方を生徒と共に学んでいく営みであり、それは生徒と共に生きることを意味と人間として生きる喜びを求めていく営みである。道徳の授業の意味を考えると、教師としてのスタートを切った藍住中学校で出会った二人の生徒のことが、懐かしく思い出される。一人は女子生徒(A子)、A子は私が初めて学級担任をしたクラス(2年)に2学期中頃転校してきた生徒である。家庭崩壊という状況から問題行動を繰り返す、心に涙をいっぱい溜めた生徒であった。転校後10日程で修学旅行が行われたが彼女は参加しなかった。2年生全体が修学旅行に行っている4日間を学校で過ごすことになる。私は修学旅行出発の前日、1冊の本を彼女に託した。灰谷健次郎著『兎の眼』であった。彼女はその本の感想を

次のように記していた。

《“バラ……”私は1枚目のページをめくって、“ああ、長い文章だ”と思いながら読んでいった。「鉄三」、私はこの子を想像しながら読んでいった。私ははじめ小谷先生と同じ気持ちで、“この子はなんちゅう子かいなあ”と思った。“バラバラ……”と読み続けた。毎日毎日読むにつれ、私自身、鉄三や小谷先生の本当の気持ちを見つけることができた。鉄三や小谷先生は、自分をかくさないで本当の自分をぶつけ合い、本当の気持ちをわかり合おうとしている。この小谷先生はきれいごとですませようとしないう先生だと思った。私たちのまわりにはきれいごとですまされる場合が多い。しかし、それに気づかず何もしないで終わる。だれも何もしない。私はこんな生活がいやだった。私は思う。藍住中学校に足立先生や小谷先生みたいな先生はいるのだろうか。先生と生徒が一緒になって何かをやっていくことができているのだろうか。私は「兎の眼」を読んで作文をいっぱい書きたいと思った。自分の思ったままを書いて、間違った考えを持っているところは直し、自分の気持ちをしっかり持ちたい。そして、作文を書いて、本を読んで、私は自分自身を成長させていきたい。私は今まで間違った考えのままやってきた。そのために今の自分になった。私は本が好きだ。作文は上手な文章を書くことができないからきらいだけど、書くことは好きだ。「兎の眼」、こんな本ともっと早く出会っていればよかったと思う。こんな感じの本は初めてだ。転校してきたみな子ちゃんと私が重なって見えたときがある。足立先生プラス小谷先生が先生のように思えた瞬間があった。みな子ちゃんという転校生に、本の中ではみんながみんなの中に入っているいろいろな苦勞があったけど仲間になれた。私のクラスはどうなるだろうか。私は素直に自然に話をしていくことができると思う。早く話がしたい。最後に、「兎の眼」を読んで、これからもいろんなことを作文に書いてみたいと思った。》

「兎の眼」を通してA子との会話が始まり、心の交流ができていったと思う。そして何よりA子との信頼の絆をつくりあげることができたのは、A子が私の問いかけや語りの中で、生き生きと目を輝かせた道徳の時間があったからだと思う。A子が道徳の時間について語った言葉が心に残っている。

「道徳の時間は数学や英語と違って百点も零点もない。自分の思うままに感じるままに自分を表現できる。そして、みんなの本当の思いに触れられることができるから、道徳の時間が好きなんだ……。」

私は私を信頼し必死に自分をぶつけてくるA子の姿に励まされながら、週1時間の道徳の時間を精一杯すばらしいものにしたいと頑張り続けてきた。そして、道徳の時間の充実が、クラスの仲間全体の生き方を励まし、人間として生きることを問い続けていく土台となるものが、道徳の授業を通して培われてきたと思う。

もう一人は男子生徒（B夫）、校内暴力の問題が新聞紙上ににぎわしたときの生徒である。B夫も問題生徒のリーダー格として存在していた。B夫を3年で担任した。本当に揺れに揺れた1年であった。厳しい状況におかれたこともあった。さまざまな困難な問題を抱えながらも、B夫の生き方を励まし、B夫に生きることを自覚させていったのが、まさしく人間としての生き方を求め続けてきた道徳の時間であった。

B夫は道徳の時間、いつしか私に食らいついてくるような眼差しをおくってくるようになった。道徳の授業を中心に据えたお互いの存在を人間として認め合う語らいの教育がなかったならば、B夫と私との今の関係はなかったであろうし、道徳の時間に寄せる情熱もこれ程強いものにはなっていなかったと思う。B夫が道徳の時間を安易に考える教師に怒りをぶつけるかのように語っ

た言葉が今も私の胸につき刺さっている。

《先生、数学や英語の時間、授業を受けるんがしんどなって、授業さぼったろうかと思うことがある。そやけど、道徳の時間だけはさぼりたいや、さぼろうや思うたことがない。道徳の時間はなぜか感動した。力が湧いてきた。道徳の時間は大事にせないかんと思った。》

私はこの言葉の奥に秘められた思いをしっかりと担ぎ、生徒一人一人の本当の思いに寄り添いながら、道徳の時間の重要性を訴えていきたい。

私に道徳の時間のあり方について目を開かせてくれたA子やB夫をはじめとするかつて学級担任として出会い、共に道徳の授業に取り組んでくれた生徒たち、その多くの生徒たちの励ましや支えの中で生かされてきたと思う。そして、その頃その私を大いなる力で包み育んで、私に繰り返し繰り返し人間そのものを語り問い続けてくれた先生が存在した。佐藤文彦先生である。

佐藤先生との出会いは、私に私の生きる道を明確に示してくれるものであった。佐藤先生の言葉の一つ一つが、私の道徳教育に取り組む大きな支えとなっている。佐藤先生との出会いがあったからこそ、A子やB夫をかけひきなしに丸ごと愛することができたと思う。佐藤先生はまさしく私の教育の師であり、人間としての生き方を求めていく支えである。

私は佐藤先生の教えに励まされて、多くの生徒たちに対する熱き思いが大きくなっていったと思う。その佐藤先生が、一つ一つの言葉や文節の意味をかみしめながら教えてくださった資料の一つが「瀬戸のかじこ」であった。

私が鳴門市瀬戸中学校に赴任した1987年から2年間、瀬戸町内の3小学校と瀬戸中学校とが連携して道徳教育の研究に取り組むようになる。道徳教育協同推進校として文部省の指定を受け、道徳教育の研究にかかわる機会を与えられることになった。特に私は道徳教育主任として数多くの研修の機会に恵まれた。

学校全体が道徳の授業研究に取り組んでいくために、まず私が道徳の研究授業に取り組んだ。その時に行った授業が佐藤先生から以前ご指導をいただいていた「瀬戸のかじこ」であった。その授業では生徒一人一人の生活にかかわって、資料「瀬戸のかじこ」に寄せる一人一人の思いが語られていった。

貧困と耳が悪いということがかじこの仕事につくようになった村田正美に寄せてある生徒が次のように語る。

《実は、僕が、石原光男、村田正美、伊藤三郎、佐々木民治の4人の中で、一番つらさがよくわかるのは、村田正美という少年です。なぜかというと、僕とこの少年は一つ似ている点があるからです。それは、耳が悪いということです。どうやら、村田正美は両方らしいけど、僕は右の方が悪いのです。僕は全く聞こえないというわけではないけど、ちょっと聞きとりにくいんです。そこで、僕は精密検査をした方がいいと思って、耳の病院へいったところ、その病院の先生に「耳が悪い。こんな耳じゃ、パイロットや駅員には、なれんなあ」というようなきついことを言われたことがあります。つまり、村田正美と僕は、同じような感じで一人の普通の人間としては、見られなかった。僕は正直いってそのことがかなりショックでした。本当につらかったです。一人の人間として認めてくれないということが、たまらなくつらかったです。でも、母の協力もあり、僕は立ち直りました。「それがなんな！」と思って、「歯を食いしばって生きていったら」と決意をしました。僕は、今でもそう思い続けています。村田正美は、自分が認めてもらえないと、自分をあきらめて、開き直っていたけど、後に二人の仲間に支えられて、勇気を奮い起こし、強く生きる決心をして島を逃げました。僕も、多くの仲間と共に強く生きたいと思っています。》

ハーモニカを心の支えとして生きてきた伊藤三郎に寄せて次のような発言がある。

《瀬戸のかじこの中に、伊藤三郎という少年が出てきます。この少年は、ハーモニカを大切に持っていました。感化院の小使さんがくれたものでした。でも、この小使さんにとって、そのハーモニカは、死んだ子供の形見でした。そんな大事なものをなぜ感化院なんかにいた子供にあげたのだろうかと思いました。僕はこの話を学んでいく中で、それは人間の本当の優しさであることがわかりました。僕には、なかなかできない行動だと思います。でも、僕はこの優しさというものを早く身につけたいです。この優しさがあったからこそハーモニカが、三郎の生きる支えとなり、このハーモニカがあったからこそ、島を抜け出すまで頑張れたのだと思います。もし、ハーモニカがなかったら三郎は、島を逃げ出すことさえも、また、その勇気さえもなかっただろうと思います。そのころは、もちろん、今の時代でさえ、そんな優しさを持った人は少ないのに、この小使さんは本当に素晴らしいと思いました。僕は、その優しさを学んでいきたいと思います。》

《感化院の小使さんが、別れるとき伊藤三郎に「島へいったらふいて遊べ。そして、よう働いて、立派な漁師になれよ」とポケットに押し込んでくれたハーモニカは、三郎の生きる支えであり、心の支えであることを学んだとき、私は、中西のおばさん（当時の瀬戸中学校の用務員さん）のことをふと思いました。この前、創立40周年に記念のリボンを作っていたとき、中西のおばさんが、毎年卒業生のために一人一人のリボン作ってくれていることを知りました。「みんなにしてあげることは、こんなことしかないんよ」とたくさんのリボンを心を込めて作ってくれていることを知りました。私たちは小学校のときから、自分たちでリボンを作っていました。だから、他の中学校が、リボンを買っていたなんて知りませんでした。私は、中西のおばさんの手作りのリボンの話を聞いたとき、おばさんの優しさが、私の心の中にとても温かいものとして伝わってきました。私たちは、おばさんの優しさに包まれてとても幸せだと思いました。私も、三郎のようにおばさんの優しさに支えられながら生きています。》

この学習は、まさに人間としてのあり方、生き方を生徒一人一人に問いただす学習となっていたと思う。生徒一人一人の発言を大切に授業記録としてまとめ、佐藤先生に読んでいただいた。

数週間後、佐藤先生はその授業記録を書き写されて一冊の冊子にまとめられた。佐藤先生は「先生の授業記録、先生の願いや子どもたちの思いをより強く受けとめたかったから、私の手で書いてみました」と言われ、佐藤先生は先生自身が書かれた授業記録の冊子をくださった。本当に胸がいっぱいになった。

佐藤先生は、私を励ますように私の思いを受けとめ、私に教師としての生きる指針を示してくださった。私は佐藤先生に生かされながら、日々の教育実践に自分のすべてをぶつけているように思う。

佐藤先生は、私が瀬戸中で初めて「瀬戸のかじこ」の授業をした翌年の1988年1月30日にご逝去された。年明けに入院されたということを知り、しばらくしてから大変厳しい状況だということを知らされた。

佐藤先生が「瀬戸のかじこ」の授業記録を書き写してくださったとき、死期が近づいておられるということを知っておられたのだろうか。さまざまな思いがこみ上げてくる。

私は佐藤先生が亡くなる5日前の1月25日にお見舞いに行った。「昼間は40℃近くの熱が出ているんですけど、今は熱は下がっている」と言うことで10分程話をさせていただく。佐藤先生はその時も、私のクラスの生徒のことを聞いてくださった。私が今生徒たちと取り組んでいる道徳の時間のような話をすると、佐藤先生は「先生の教室は教育という世界を超越していま

すよ。本当の教育とは、互いの存在を尊敬し、信頼の中から築かれていきますね」と見舞った私を励ましてくださる。見舞いにきた私は逆に励まされ、この感動を明日早くクラスの生徒たちに伝えたいと思い病室を後にした。人間はどこまで美しくなれるのだろうかとつくづく思う。帰りの中央病院のエレベーターの中で、熱いものがこみ上げてきて胸がいっぱいになっていたことが鮮やかに思い出される。佐藤先生との最後の時となった1988年1月25日は、どんなことがあっても忘れることはない。

佐藤先生の言葉の一つ一つが、私の生き方を励まし私の心の中に生き続けている。特に1988年元日にいただいた佐藤先生からの最後の年賀状に記されていた「美しさを求めて生きる人生を」という言葉……。私は今も、この言葉の意味を求めて、道德の時間に自分を語り、自分のすべてをおつけている。

3 瀬戸中学校(3年目)坂村真民先生との出会い

人生とは出会いであるとよく言われるが、人生の節目節目に人は、人生観が大きく変わるような出会いを経験していく。私は1989年の夏休み、私の人間観を大きく変えてくれた出会いを経験する。それは愛媛県砥部町に住まわれている坂村真民先生との出会いである。坂村先生は、愛媛県の公立高校の教員を退職された後、私立高校の教壇に7年間立たれ、その後砥部町のタンポポ堂と称されるお住まいで文筆活動をされている。

1989年の夏休みも終わりに近づいた日、私は私の家族(妻と当時1歳7カ月の長女)を連れて、タンポポ堂(坂村先生のお宅)を訪ね、坂村先生から人間としてのあり方、生き方にかかわる話を聞かせていただいた。坂村先生は私の大きな身体を見るなり言われた。

「あなたはその身体、その体力に感謝しなければなりませんね。そして、あなたは私のような体力のない教師の苦しみを知らなければならぬし、私のような生徒、(かつて、坂村先生は貧困の生活の中にあって、人間不信、教師不信の中に学校生活を送られたと言われる)誰一人として教師を認めない、尊敬しない生徒のいることを知らなければならぬ」と話された。

そして、本当の教育を求めて50数年前に朝鮮に渡られたことなど、坂村先生自身が生きてこられた道を通して、生きることの意味をしみじみと語ってくださった。

最後に「力の教育は本物ではない。子どもを管理した中では本当の教育は生まれぬ。教育とは、その1年間、そのときに知識を伝え、知識を教えたというだけでは教育をしたとは言えない。教育とはそんな簡単なものではない。難しいものなんだ。生徒が40歳になったとき、50歳になったとき、かつて、受けた中学校の教育が、昨日のこのように新鮮であり、生徒の人生を励まし続ける。何十年も生き続けるものを生徒の中に残せたとき、教育をしたと言えるんだ」と話をされた。

坂村先生の声が、坂村先生の表情が、坂村先生の眼の輝きが、鮮やかに私の脳裏に刻まれている。坂村先生の2時間ほどの話、その一言一言に、目の鱗が落ちるような、体全身がぶるぶる震えるような感動が沸き起こってきた。人間としてどう生きるか、人として何を大切にしなければならないか、私のこれからの人生の中に明確な道しるべを示してくれた出会いであった。

私は6年ぶりにそのときの録音テープをおこしてみた。あの日のことがつい昨日のようによみがえってくる。私にとって強烈な話であった。以下その原稿とそのときいただいた色紙に書かれていた詩である。

※

※

※

あなたはそんな体格もっている。その体格だけでもどれだけ感謝しなければいけないか。私なんかは何の力もない。あなたは柔道をやっておいでた。私は何の力も持たない。全くの無力です。無力で無気力にさせられた子どもたちに立ち向かっていく。そのことの大変さはあなたにはわからないだろう。私は公立高校を退職したあと、7年間私立の高校に勤務した。その私立高校は、公立高校へ行けなかった子どもがやる気をなくした状況で入学してくる。

その学校にはあなたのような体格をした柔道の先生がいた。その先生は生徒たちがいかに従順であるかということしか知らない。「わしの授業では悪い生徒は一人もいない」と言われる。生徒の力で押さえつけられた一面しか知らない。ところがその先生の授業の次の授業では、その先生の前では非常にまじめでおとなしかった生徒が、次の時間、僕のような無力な教師が来るとがらりと態度を変えてしまう。そして、したい放題の状態になってしまう。

教育というのは力で押さえつけてしまうと大変な反動があるということを知らなければならない。だから、生徒は良いんだ良いんだと思っていっても、あなたのような人には生徒の本当の姿はなかなか見えない。力の教育の反動で次に授業をする先生たちがどれだけ苦しんでいるかを知らない。叱られる、恐ろしい、それだけで彼らは先生を尊敬したような顔をする。しかし、私のような教師の前では、その従順な姿ががらりと変わって授業ができない状態になる。

そのことをわかっているかわかっていないか。そのことをわかっている人は、「先生、すみません。私の授業は、次に先生が来られるとどんなに生徒が悪くなって、先生が大変だということがわかるんです。そのことを生徒たちに話すんですけど、私の力不足です」と言われる先生もいる。でもそのことに全く気がつかない先生もいるし、私のような人間を全く否定する先生もいる。私たちは生徒の内面をもっともって考えていかなければならないと思います。

もう一つ考えなければいけないことは、私のような人間が生徒の中にもいるということです。私のような人間というのは、小学校、中学校、大学といろいろな先生と出会ってきたけど、学校の先生を一人も尊敬していない生徒の存在です。「仰げば尊し」の恩なんて私にはない。そんな目で教員を見ている私のような生徒が今も生徒の中にいるということです。ほとんどの先生は自分が良い先生だと思っている。それは教師として当然の意識です。でも私の少年の頃、そして学生時代の私にとって良い先生はいなかった。

だから私は教員になったとき、私が少年のとき先生を見てきたような思いで私たち教員を見ている生徒がいるだろうということを意識してきた。そして、そういう子どもたちに僕はどう教えていくのかということを考えてきました。そのことを考えながら教師をしてきたことが、私にとってもすばらしい生き方をさせてくれたと思っています。

何より、そのことを考えていくことによって、私自身が私の差別意識と向き合って生きていく生き方をさせてくれました。そして私はどこへ行っても差別をしない生き方を私なりに貫くことができたと思います。戦前、朝鮮で教員をしたときもそうでした。公立高校を退職したあと私立高校で教員をしたときもそうでした。先生だけは差別をしなかったと子どもたちは言いました。

私が最後に勤めた私立高校の子どもたちは傷つけられて入学してきました。「姉さんは良いが、兄さんは良いが、お前はダメだ」と言われて子どもの頃から差別されてきた生徒、高校に入学してきてからも、同じようなことをずっと言われてきた生徒、「お前の兄さんはあんなに優秀なのにどうしてお前はダメなんだ」そんなことを言われながら学校へ来る。そんな状態で差別され無気力にさせられてきた生徒たちの苦しみや悲しみを知らずに、ただ力だけで押さえていく。その

教師の押さえつけに子どもたちは屈しておとなしくなる。そのおとなしい表面を見て生徒は良いんだと言う。教師の狭い視野だけで子どもたちを判断している。そんな中で育った生徒が大人になって本当の人間になれるのだろうか。そんなことを訴えながら教師を続けてきました。

あなたのような迫力、力でぐいぐい押してくる教師に子どもたちは権威のようなものを感じて、おとなしくしている生徒もいるでしょう。それで教育ができていると思ったら大間違いですよ。あなたはそうでないかもしれないけど、そんな教師が現実が多いんです。

そんな力で押さえつけられた生徒は、私のような何の力もない人間に対しては猛烈に自我というものを野良犬のようにむき出してくる。そんな生徒の本質に気づかない教師にどう教育のあり方を訴えていくか、私は教員をしながらそのことに苦しんできた人間です。

かつて戦前、私が朝鮮で教員をしたときに、厳しい差別を受けてきた朝鮮の生徒に対して正面から向き合っていた。その生徒たちと数年前朝鮮で再会したとき、彼らは私に語った。

「先生だけは差別をしなかった。だから50年前のことが昨日のように思い出される。」

教育というものは実にむずかしいものです。教育というのは14歳や15歳の子どもを教育するのではない。身体は14歳や15歳でも50歳になったら60歳になったらどうやって生きていくかということを見据えて、そこまで教育していかなければいけない。ただ14歳や15歳の子どもの何かうまいぐあいに教えて指導して、生徒たちも「先生、先生……」って言うから、ああ自分の授業はまあ大体良いんだらうと思ったら大間違いです。40歳になったら50歳になったらというふうにならぬ人生をどう生き抜いていくかということ、もっと言うなら死ぬまでのことを考えてこそ本当の教育なんです。

私が生まれたときは、日本が一番不況のどん底でした。だから大学を出たってしょうがない。大学を出ても仕事に就けないという時代でした。そんな状況から戦争に入っていくんですけど、そのとき僕は教員をやっていました。当時の学級は男女に分かれていて男子の5年生のクラスを受け持ったんです。そのとき先輩の先生から言われた。「Kという生徒はバカですから、ほっときなさいよ」って……。しかし、僕はこの子から教えられたんです。

その子は小学校の5年間で「あいうえお」の「あ」の字も知らない。何一つ教えられることなしに放ったらかしにされてきた生徒です。その生徒を教えたことが私にとって本当に良かったんです。私に人間の生き方や教育のあり方をその子は問いかけ続けました。その中で今まで気づきもしなかった世界をその子を通して知ることができました。

そして、私はその子にいろんなことを教えていこうとする中で思ったことがあります。それは、今までその子とかかわってきた教員は、教員として5年間その子に何も教えなかったことに自責の念を感じないんだらうかということです。あの生徒はダメだから放っておきなさいという教育が今もなされているように思います。

教育について私が思うことは、目の前の一人の子どもに必死になっていくことが大切なんだということです。あらゆるものから捨てられた一人の生徒のために力をかけることができるかどうかということが教育なんだと思います。

だから私は教えるなんて言ったことがない。一度も言ったことがない。私は教える資格はないと思ってきました。教える資格がないのに、私は家族のために、妻を養うために、子どもを養うために教壇に立ってきた。だから昨日も宇和島の先生（私が公立高校の教員だったときにその高校の生徒として出会った人たち）に教える資格がないのに生活のために教壇に立ってきたんだ

「すまない」と謝った。教育ほどむずかしいものはないんです。教育の理論より、まず教育にか

ける本当の愛情があるかどうかなんです。子どもたちを丸ごと愛し、子どもたちと共に歩いていこうとする本当の愛情があれば生徒たちはついてくる。生徒の中には僕のようにひねくれてジグザグの生き方をしてきた生徒もいます。だからこそ教員が本物であるかどうか厳しく問われていくと思うんです。

そんな本当の教育にしていくために、さまざまな困難を乗り越えていく必要があります。人間はある意味で苦勞を乗り越えていくということが必要です。あなたは部落に生まれたということで、生まれながら部落差別という苦勞をしてきた。そのことはマイナスではなくプラスです。人の悲しみを人間の悲しみを知っているということは大きなプラスです。決してそれは卑下する必要がない。私もだれも味わうことのない差別を受けて若いときから苦しんできた。その苦しみを乗り越えていくことによって、私の人生はより豊かなものになっていきました。

仏様がどうして拝まれているか、それは悲しみを知っているからです。悲しみを知っている者が本当の人間です。キリストにしても釈迦にしても人の悲しみを知っているからしたわれるんです。あなたは部落に生まれたという悲しみを知っている、それは人間の悲しみです。その悲しみを知っているということは人間としてすごいことなんです。あなたは人間として最も大切なものを知っているんだから堂々と生きて、あなたはあなた自身の存在を誇りとして、あなたの生き方や生きざまを多くの人たちに話して下さったらいいいんです。

私は父を早くになくした。そのことによってどん底の状態を生きていくようになりました。しかし、そのことが逆に良かった面もある。私はそのことによって人間を上から見のではなく、下から見ることができる人間になれた。そのことは、本当にありがたいなあと思います。価値観を変え、自分のあり方をしっかりと見つめ、明るく堂々と生きていくことが人生をより輝いたものにしてくれます。

あなたはそのような体格をなさっている、そのことがどれだけプラスになっているか。私なんかは何の力もない。その中で教えていくということはあなたが使わないエネルギーをどれだけ使っているか。そんな私のような教員が苦しんでいることをしっかりと認識していくことが大切です。

昨年、韓国へ行って戦前私が教えた子どもたちと会ってきました。55年ぶりにあったんです。私が教えた頃の年齢は13歳ぐらいでした。彼らは2年か3年前に私の授業を受けたように私の授業を覚えていました。先生は黒板に書くときどうだったか。教室に入ってきたときどうだったかと細かく覚えているんです。彼らと55年前に帰ったような気持ちになって出会えたこと、再会できたことを本当に喜び合いました。

私は思うんです。私の心の中にある悲しみや、人間としての見方が電流のように伝わっていく。その中で人間として互いの存在を認め合う、深い信頼という絆が生まれていく。それが本当の教育だと思うんです。さっき私が言ったように教育というのは1年間を2年間を3年間を無事教えたというものではない、55年たったけど、教えた私の言ったことを昨日習ったことのように覚えている。そんな新鮮な感動となっていくまでも生き続けるのが、それが本当の教育であり、教育の本質だと思うんです。

私は教員をして本当に良かったと思います。かつて出会った子どもたちが、今さっき咲いた花のようすやその感動を語るように、私に接して私の授業を話してくれる。教育というのは卒業したらすぐに忘れてしまうものではなくて、60歳になっても70歳になっても胸を熱くし、若さを持ち、希望と愛情を持つ。そういう人間をつくっていくことが教育じゃないかと思います。

ある作家が良寛の生きざまを描いた。みんなは良寛と言ったら心優しいすばらしい人だと言う。その作家はそんな良寛を違った面で描いたんです。良寛とお手玉をして遊んだ女の子、その女の子の何人かが売られていき、大変苦しんだに違いない。それを良寛はどうして歌に描かないのだろうか。良寛の作品の中にそんな歌が一首もない。その作家はそれが不思議でならないと語った。私は良寛というのは善人でこんな良い人はいないと思っていた。本当に仏様のような人だと思っていた。しかし、その作家はそうは描いていない。

自分とかくれんぼをして遊んだ女の子たちが売られていった。そんな社会であったのに、そんな事実をいっぱい見てきたはずなのに、なぜそんな女の子の悲しみや苦しみを描かないのか。そのことが不思議でならないと訴えているんです。私はその文章を読んだとき、今までだれもそんなことを言ったことはないのに、やっぱり作家というのはすごいなあと思いました。私は良寛が好きなのに、そんなことを考えたことがなかった。なるほど、良寛は良い人で、子どもとかくれんぼして遊んで、子どもが見えなくなってもまだ隠れていた。どんなことがあっても人を疑わない人であった。そういう人だと思っていたのに、その作家はそうではないと描いている。

今でいうなら貧農の子や部落の子であったために売られた子どもたちです。そうした人たちの存在を良寛は知っていたのに、そういう人たちの話はどこにも書いていないのはおかしいと言ってます。そう言われれば本当におかしいと思います。

部落差別についても、先生方は教えているけど、その本質に気づいて授業している先生は本当に少ないと思います。これは絶対放っておいて解決する問題じゃない。あの差別の構造というのは、今の階級制度と同じです。差を付けることによって社会が維持されている。たいていの人が名刺を出すでしょう。課長とか、課長補佐と書いてある。小さな銀行でも支店長とか支店長代理と書いてある。補佐とか代理とか主任とか、あの人より私は上だという意識を持ちたいし、持たせたいと思うんです。

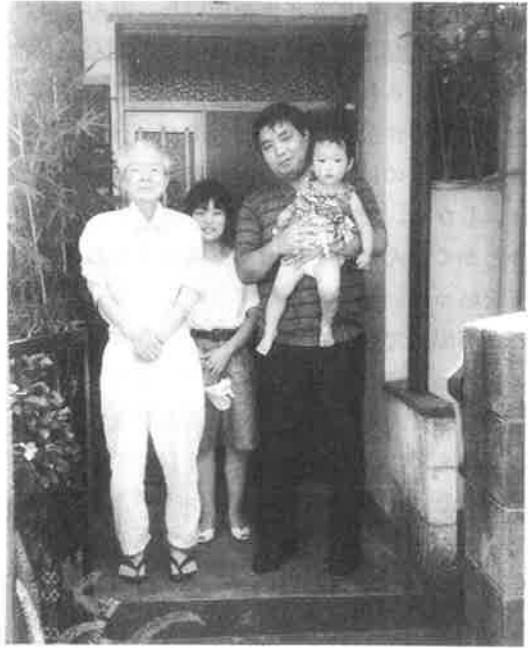
だから最後の一番どん底の人間が必要とされるんです。そういう存在としてつくられたのが部落の存在です。そんな差別構造を維持していくことによって江戸時代はあれだけ長い間続いたわけですからね。その差別の構造がしっかりととらえられたら、差別することの愚かさがすぐにかかっていく。

もう一つ、この差別を残しているのは感性です。知性じゃなくて感性だからそれは本当に難しい。知性なら説明すればわかる。ところが感性は、説明するだけでは変わっていかない。感性を揺さぶるとするのは本当に難しいものがあります。好きでないものを好きになれというのは心の奥底を揺さぶらなければ、そう簡単には変わるものではない。人参の嫌いなものに人参を好きになれといってもなかなか好きにはなれない。感性というのは舌の感触なんかの感覚で、その人間の中にしみこんでいる。その染み込んだものを変えていくという教育、それは本当に難しい。しかし、その部分を心の奥底に届かないものは教育とは言わない。人間の感性を揺さぶり、人間の真実に触れてこそ、それは本当の教育と言えるんです。その意味において部落差別を始めとするさまざまな差別をなくしていく教育は、本当の教育ですよ。



《タンポポのように》

愚痴を言うな
弱音を吐くな
勇気と正義をもって貫いてゆけ
ごまかしはすくばれる
タンポポの根のように
踏みにじられても
食いちぎられても
芽を出し
花をつける
強さを持って
幸福をまき散らすというのが
タンポポの花のことばだが
自分の幸せを求めながら
人の幸せを考えてゆく
人間になれ
それをこのタンポポから学べ
きずつき倒れている
一羽の小鳥を助けてやる
善意の心を失わずにゆけ
零下十数度の寒冷にも堪えて咲く
この小さな野草の強さを
身につけようではないか



坂村真民先生宅（タンポポ堂）1989年8月



4 板野中学校・1991年度同和教育への目覚め

1991年度、この1年の営みは私に生きる勇気と自信を与えてくれた1年間であった。1991年は、私にとって教職の道を歩み始めてちょうど10年という節目の年である。この節目の年に3年B組の生徒たちと出会えたこと、ただ感謝の言葉しかない。この1年間に繰り返された数々のイベントを3年B組の生徒たちは見事に頑張り通してきた。一つのイベント、一つの峠を越える度にたくましく心豊かに成長していく生徒の姿が、私にエネルギーをくれているようであった。中学生には私の想像を遙かに越えた限りない可能性があるということを頭ではわかっていたつもりであったが、そのことを実感しそのことに確信を持った1年であった。

4月、生徒と「峠」の詩を学んだ。私は毎年4月の学級開きのときに詩「峠」を学び続けてきた。「大きな喪失にたえてのみ、あたらしい世界が開ける」と訴える「峠」の詩と新しい学年のスタート点に立った自分を重ねる。いつまでも過去を引きずるのではなく、「峠」の詩に今の自分を思い、新しい学年、新しい学級との出会いを大きな成長の場面にしたいと願い続けてきたからだ。1年間、人間としての生き方を考え続けた道徳の時間のスタートとして詩「峠」の学習があった。（1993年度の授業記録・242頁）

生徒と共に「峠」の詩を心の支えとして生きる私のこの1年の最初の峠は、新学年早々に実施

された家庭訪問であった。昨年度より続けてきた学年全体による部落問題の学習、部落問題が私にとって何であり、生徒にとって何であるのか。そのことをはっきりさせることなしにいくら部落問題学習を続けてきても、常に表面的なものでしかない。自分の立場を自覚し、自分自身の本当の生き方を求めていくことは、つらく悲しいことであるかもしれない。しかし、その苦しい部分をしっかりと見つめ、自分自身のおかれている状況を自覚することから、人間としての本当の生き方をつかむことができ、生きる喜びや幸せを実感していくことができると考えた。

私は部落差別の中を生きてきた苦しみや悲しみ、そして喜びを家庭訪問の場で生徒と親に語っていった。差別の中を生きてきた私の本当の思いを通して、生徒たちに部落問題学習の意味を明確に自覚してほしいと願った。このことは対象地区生徒にとっては、厳しい差別の現実を見つめることになった。

今年の家庭訪問で初めて自分が部落出身であるということを知った生徒が二人いた。この世に部落問題が存在する限り、社会的立場の自覚は中学校入学までにさせてやりたいということをしみじみ思った。

一人はA子であった。まさか自分がそうだとは思っていなかったと、涙が溢れてくる。「去年、『私の目をみて！』の授業のとき、先生が部落の人間だといったときどう思った」という私の問いかけに、A子は涙を流しながらではあるが「そんなん関係ないと思った」とはっきりと答えた。しかし、A子の涙は止まらなかった。あの涙は本当につらかった。あれほどA子に悲しみの涙を流させる今までの部落問題学習とは何だったのか。そんなことを思いながらA子の家を出た。あの頃は親の顔を見るのも嫌だったとA子は言う。

その日の教育記録（週録）に次のような文章がある。

《昨年度2年B組で部落問題学習に取り組む中、部落問題に対する憤りは育っていった。しかし、自分にとって部落問題が何であるかという学習、社会的立場の自覚をさせていなかったため、中学3年の家庭訪問で初めて自分の立場を自覚したA子。部落差別は許せないと、すばらしい生き方をつかんでいくんだと思ってきたA子であったが、自分が部落の人間と知ったとたん、涙がとめどなく流れてきた。あの涙を怒りの涙、人間としてのあり方を求めていく熱い涙に変えていく営み、それが私のこの1年の営みである。》

あれほど悲しみの涙を流したA子が、板野郡同和教育研究会の公開授業（161頁）において、仲間の励ましの中で立ち上がっていく。まだA子の目には涙があった。しかしあの授業を通してA子は大きく成長していったと思う。翌日の生活ノートは私に部落問題学習に取り組んでいく自信のようなものをくれた。

《私は今日の発言で部落のことが恥ずかしくなくなりました。もう何のこだわりもありません。発表している時は自分で何を言っているのかわからず、涙が出てきたけれど、SさんやJさんが発表したのに、私だけ黙っていてもいけないなあと思っていたんです。そしたら、自然と手が挙がったのが不思議でした。心臓はドッキンドッキンと破裂しそうだったけど。私の発言の後、Kさん、Oさんたちが言ってくれて、ほっとして発表してよかったなあと思いました。泣くのは今日で終わりにします。M君とか、Tさんとかも他人の涙は見たくないと言っていたし。今日の授業で私は多くの人に支えられているなあと実感しました。みんな信じ合える仲間です。板野に生まれたこと、部落に生まれたこと、まだまだ不安とかがあるけど、私は強い人間になりたいです。「歎くより怒ることだ」を胸にきざんで。今日で新しい道が開けたような気がします。今まで「学習会の通知やもらいたあない」と歎いていた自分がばからしくなりました。これからも学習

会に参加していききたいし、どんどん学習していききたいです。いつか絶対絶対差別がなくなっていると思います。何か、楽しみです。とにかく、今日の授業、忘れられない一日になりそうです。うれしかった。よかった。ビデオ貸してください。》

A子は板野郡同和教育研究大会の公開授業を通して確かな一歩を歩み出した。

もう一人は、B夫である。B夫も家庭訪問の日までは自分が部落出身であるとは夢にも思っていなかった。私の言葉で自分が部落出身であることを知ったB夫は、涙こそ流さなかったが、目はうつろになりその瞳は焦点を失っていた。私の「つらいか」という問いに、一生懸命首を横に振って見せるが、今まで滑らかにいろんな思いを話していた口は固く閉ざされてしまった。今まで全体学習で発言してきた思いは何だったのか。部落の仲間と共に頑張っていくと多くの仲間と思いを交わし合ったのに、自分がその部落の人間であると知ったとたんに言葉を失い、何かに絶望したように動揺していく。今まで生徒たちに生きる力をつけていく部落問題学習をやっていたんだと言い続け、実践してきたことは何だったのか。B夫の動揺し悲しみの色を隠せないうつろな目は、「先生、助けてください」と訴えているようだった。そのB夫も板野郡同和教育研究大会の公開授業で涙を流しながらも必死に自分の本当の思いを語っていくクラスの仲間の支えや励ましの中で、B夫自身は吹き出るような涙を流しながら、本当の思いを学級全体にぶつけた。B夫が語った「部落の人間ですって気軽に言える社会を目指して頑張っていきたい」という言葉が私の心につき刺さっている。

本年度の家庭訪問は、私自身が私自身の生き方を問いただしていくものにもなっていた。あるお母さんは、私の生きざまと自分の歩んできた道とが重なったのだろう。思いがこみ上げてきて涙を流される。「お母さん、誰もが涙や流さずでいい社会にするために同和教育、徹底的に頑張るけん」という私の話にしっかりとうなずいてくれた。その横にいたC子は次の日、生活ノートに次のように記している。

《家庭訪問の日、母は泣いた。この涙は部落のものにしかわからない。母は先生の話の中で、心の中にこみ上げてくるものがあつたのだろう。自分はあるとき、「耐えろ。何で泣くんや、くやしいんか」って心の中で叫んでいた。自分までも涙をこらえるのに必死になっていた。しんみり湿った話の中、私は母につらい思いをさせる差別をたまらなく憎んだ。泣いてたまるか、差別に負けない人間になってみせる。弱い心にさようならして、本当に強い心で生き抜きたい。》

C子は繰り返される部落問題学習の中で、より確かな生き方をつかんでいった。C子は将来教職の道を目指して頑張っている。

D子の祖父は、私の思いにこたえてしみじみと生きざまを私に語ってくれた。

《先生、私は9人兄弟の3人目に生まれた。家は貧しかった。小学校2年からは一切学校に行っていない。字を知らない。全く書けない読めない状態で、誰も教えてくれる人はいなかった。そんな中であつても一人で学び、字が読めるようになってきた。そして、会社を退職してからは、今まで字が書けなくて字を書かなかつた分、今一生懸命書き物をしている。そんなに長い時間同じ姿勢で書き物なんかするから、肩もこつてくるし腰も痛くなる。そんなことしなくてもいいのにとおばあさんは言ってくれるが、このことは私に課せられた私が生きていく試練だと思って書き続けている。》

D子の家庭訪問は、学ぶこと生きることの意味を考えさせられた家庭訪問となった。人は生きざまをぶつけていくことにより心を開いてくれる。そんなことをしみじみと実感し、何か勇気のようなものがこみ上げて帰路についたことを懐かしく思い出す。

私はそんな一つ一つの家庭訪問を通して、私自身も大きな峠を越えていくことができたと思う。また、この家庭訪問によってこの1年、私の歩むべき道を私なりにつかむことができたと思う。

部落問題の学習とは教師と生徒、生徒と生徒、その互いの生きざまと生きざまがぶつかり合う、生き方と生き方を語り合う中から、差別解消に向けて生きていこうとする本当の生き方が見えてくる営みだと思う。教師の部落問題に関わる本当の生き方、そのことが授業の土台に流れない限り生徒の中から部落問題に関わる本当の生き方も語られることはないと思う。本当の思い、本当の生き方をぶつけ合うことなしに、いくら部落問題学習を続けても、常に表面的なものでしかない。自分の立場を自覚し、自分自身の本当の生き方を求めていくことは、つらく悲しいことであるかもしれない。しかし、現実に部落差別がある限り、差別の現実にあきらめず、悲しみや苦しみを見つめることなしに、どうして本当の幸せが見えてくるだろうかと思う。

私は差別の中を生きてきた私の思いを通して、生徒たちに部落を自覚させ、部落をとらえさせていった。このことは対象地区の生徒にとっては、厳しい現実を見つめることとなった。部落差別の中で喘ぎながら必死に頑張ろうとする生徒の姿、その誠実な生徒の苦しむ姿を見つめる度に差別に対する憤りは激しく燃え上がっていく。どんなことがあってもこの歩みを止めてはならない、頑張り続けなければと思った。今しみじみと思うこと、それは家庭訪問での語り合いがあったから、対象地区の生徒の立ち上がっていく授業が生まれてきたんだということだ。

3年B組は常に全体学習のリーダー的役割を果たしてきた。4月30日に学校全体で初めて全体学習に取り組んだときも、他校の先生方が参観した2学期10月11日の全体学習においても、他の学年、他の学校の先生方や生徒たちへの熱き思いが語られていった。部落問題学習をすることの意味を3年B組の生徒たちは明確につかんでいた。

繰り返し繰り返し取り組んでいった部落問題学習、そのすべてを授業記録としておこすことはできなかったが、その一つ一つの授業に生徒たちの本当の思いをぶつけ、生徒たちの絆はより確かなものとなっていった。そしてその中で私の全く意図しない発言や、私の期待を遙かに越える発言が、数限りなく生まれてきた。第35回板野郡同和教育研究会の公開授業(161頁)においても、第25回全日本中学校道徳教育研究会の特別公開授業(173頁)においても、第21回徳島県中学校同和教育研究会の公開授業(193頁)においてもそうであった。

第25回全日本中学校道徳教育研究会の特別公開授業では、井上ひさしの「ナイン」という資料を学習したが、その作品についても、部落問題学習で培われた思いをもって発言を重ねていった。その火付けとなった発言には授業者である私も胸がいっぱいになっていた。その発言は次のようなものである。

《いろいろ考えているときに、一人の友だちに言われたんだけど、「もし私が部落の人間として、私がこれからのこと今のこといろいろと悩んでいてその苦しみをわかってほしくて、『私は部落の人間です』って、この3年B組のみんなに打ち明けたら、そのとき3年B組のみんなが温かい眼差しで『何言よん、そんなこと関係ないよ、これからいっしょに学んでいこう』と言ってくれたとき、それが陰をつくってくれたことになるんと違うん。私はそう思うんよ。』と言ってくれたんです。そのとき私はハッとしました。英夫と正太郎の関係は私たちが部落問題の学習で築き上げてきた関係とよく似ていると思うんです。どんなことがあって否定できない、どんなことがあっても切れることのない関係というものが、人間には必要なんだと思うんです。私たちは今まで一生懸命に部落問題の学習に取り組んできました。私の住んでいる板野町には部落と言われて差別されている地域があります。この学習に真剣に取り組み始めたのは、差別を受けて悲しん

でいる友の叫びを聞いてからです。今思うといろんなことがあったけど頑張ってきてよかったと思います。この学習を始めてからナインのような関係ができてきたと思います。一人の子が自分のことを告白する周りのみんなが支える。そしてその子の笑顔がみんなの支えになります。ナインと同じだなあとと思います。》

その発言に関わってある生徒は次のような感想を授業後に記している。

《Nさんが部落問題のことを出したとき、「ここでNさんを支えな」と思って手を挙げました。頭の中が真っ白になり周りの先生方の視線がすごく痛く感じました。けどここで訴えなければ板野のみんなを裏切ることになる。みんなの分も私が訴えなければと思いました。すると自然に言葉が出てきて、何度も何度も手を挙げるエネルギーが沸き起こってきました。》

またある生徒は次のように思いをつなげて部落問題学習に寄せる思いを語っている。

《やっぱりこのナインの資料の中には、部落問題学習で学んできたことを土台として考えた方が何かわかりやすいところがあると思います。国語の学習という意味で考えたら答えを見つけるために決まった答えを探すために、みんな同じような考え方になっていくと思うんです。でも部落問題の学習では、お決まりの答えを求めるのではなくて自分の本当に感じたことや自分の中でこみ上げてきたものを意見として語り合うことによって、どれだけ周りが反応してくれるかということが大切だと思うんです。本当の思いと思いをぶつけ合うところに部落問題学習の本当の意味や喜びや楽しさがあると思うんです。また、今まで積み上げてきた部落問題学習によってこのナインの関係は3年B組の中にもいっぱいできてきたと思うんです。支え合うということは本当に大切なことだと僕もしみじみ思っています。自分が発表したときに周りが支えてくれて、もっと頑張らないかん、こんな仲間のためにももっと頑張らないかんと思ってきたんです。実際僕は2年生のとき自分が部落に生まれたということをみんなに訴えたとき、みんながどんな反応をするかがとても不安だったんです。そのときにそんなこと気にするないっしょに頑張りたいという意見があって、ものすごく嬉しかったんです。このナインの団結とか支え合うということを考えていくうちに、やっぱりみんなのことが真っ先に出てきて、それでこんな大きな授業とかをたくさん経験してきたから、ある程度は自分の思うままの意見が言えるようになってきたと思うんです。それでさっきI君が言ったように、板野町とか徳島県とかもだんだんと変わっていくと思うんです。変わっていくことによって、昔の方がよかったなあという気持ちも残ると思うけど、大きくなってからも周りにこんな仲間がいて、互いに支え合って生きていくことができたらすばらしいと思います。これから高校へ行ったり就職したりして、周りの仲間自分の心を開いて話のできる人がいなかったら差別されるかもしれません。けど、今はこの周りに仲間がいるからどんなことがあっても頑張っていくことができます。実際、将来負けそうになったときも、今のこの仲間に相談できるような関係をつくっていきたいと思います。》

この第25回全日本中学校道徳教育研究大会の特別公開授業、私は許されることならば部落問題に関する資料に取り組み、全国の先生方に部落問題学習の喜びや大切さを訴えたいという気持ちを持っていた。その私の思いを生徒たちはしっかりとらえ、私の思いを遙かに越えて、今までの部落問題学習で積み上げてきた思いをこの授業におつけてくれた。

また、第21回徳島県中学校同和教育研究大会の公開授業において部落問題学習のあり方に迫る発言が次々と生まれた。一人の生徒が語る。

《涙を流すことではなく、自分が部落に生まれたということを誇りに思うことによって、この学習は人間としての本当の喜びをつかんでいくことができるし、より人間としてすばらしい生き方

を求めて頑張ることができるから、もっともっと早い時期に自分自身が人間らしく生きるためにこの学習をとらえて、一生懸命にこの学習に取り組むことができたら、もっともっと自分自身成長していただろうし、もっと早く変われたと思うんです。小学校の頃や中学校1年生のときだったら、僕自身真面目に取り組むこともなかったし、授業を真剣にする姿勢も周りになかったし、何かうわべだけで終わっていたような授業だって、絶対何も進歩のない授業だったと思うんです。でも中学2年生から頑張ってきた今の自分を見ていると、すばらしく進歩することができたと思います。僕は僕自身が部落に生まれたと知ったときものすごいショックが僕の中に沸き起こってきたんです。それはそれまでに部落のことなんかを小学校の高学年頃から教えられていたけど、部落の悪いイメージだけしか心の中になくて、とにかく部落というところは差別されて惨めなものとしか授業で教えてもらってなかったから、あんなショックがあったんだと思うんです。今考えてみると部落に対するマイナスのイメージしか教えてもらわなかったからそうなったと思えてくるんです。でも今はマイナスをプラスに変えるというか、自分をより大きく成長させていくことを教えてもらっているように思います。やっぱり小学校のときにもちゃんと学習して、中学校1年生のときにももっとちゃんと学習していたら、こういうショックも受けなかったと思うし、今僕たちが続けてきたような学習をもっと昔から続けていたら、部落差別というものはもっともっと小さいものになっていたと思うんです。ただ時間をこなすうわべだけの授業だったら、絶対この先なんぼ部落問題の授業をやっても、やったというだけで生徒の中には部落問題を部落という惨めなところに生まれた人の問題としてしかとらえられない授業となって、本当の意味で差別をなくしていく授業にはならないと思うんです。僕たちが中学2年からやってきた本音の部落問題学習をこれから先も大切に、絶対部落差別をなくしていかねければならないし、大きくなっても絶対差別者にならないようにしていかなければいけないと思います。》

そして、この生徒は授業後の感想をこれからの進路に思いをはせて次のように記している。

《以前から、将来の夢の中に学校の先生になりたいというのがあった。今思うと今までは普通の先生にあこがれていたんだと思う。でも今は違う。先生になりたいという夢は同じようがあるが、部落問題に必死に取り組んでいく先生になりたい。この思いは3年生の先生方を見ていて思うようになった。僕は部落問題に必死に取り組む先生方や周りのみんなの姿を見て嬉しくてたまらない。もし部落問題の学習がなかったら、自分を語ることも、自分をさらけ出すことも、自分が部落に生まれたということを誇りに思うこともなかったと思う。僕はこの学習の中で自分の意見なども思いきり表現できるし、語れるようになった。僕が3年生の先生方に部落問題に関わる生き方をつかませてもらったように、いつか学校の先生となって人間として部落問題に関わってどのように生きていくかを生徒たちに語っていくことができるようになったらなあと思う。その日を目指してこれからの一日一日を誠実に精一杯に生きていきたい。》

この徳島県中学校同和教育研究会の公開授業の最後は次のように締め括られている。

《もう時間がきてしまっていて言いたいのに言えなかった人もいると思うんですよ。だけどこの3年B組だったことを誇りにして、これからもずっと頑張ってもらいたいと思います。そして、部落に生まれた人はこれは絶対に隠して悲しんでそれで済む問題じゃないと思います。絶対この問題はおかしいから、絶対立ち向かっていかなければいけないと思います。そして、先生から聞いたことがあるんだけど、私たちがみんなで燃やし続けた部落差別をなくしていく光と炎を絶やすことなくずっと一生持ち続けて、差別解消まで共に頑張っていきたいと思います。そして、この光と炎を大切に燃やし続け、私たちのこれからの人生において出会う人にこの光と炎をともし続けて、

この差別解消の取り組みをすべての人の願いにしていきたい。そしてそのときには絶対日本から部落差別はなくなっていると思うんです。だから今ここにおいでる先生方も、私たちのこれだけ頑張った姿を見てくれたんだから、この火を絶やさずずっと差別解消の日まで頑張ってほしいと思います。》

この思いは3年B組すべての生徒の思いである。4月のスタート、対象地区の生徒は9名であった。本当の思いが語り合うことができる部落問題学習が成立したとき、対象地区の生徒は11名になっていた。胸張って堂々と下を向かずに私は逃げない差別をなくしていくために生きていく。そんな思いを仲間を信じ学級全体におつけたK子。部落に生まれた自分に不安を抱きながら揺れてきた思いと、今までの部落問題学習の中でつかんできた思いを「涙」という詩に表わしたR子。

『涙』

部落という言葉聞いて
心が重たくなるのはなぜだろう
悲しくなるのはなぜだろう

この差別のために何人の人が苦しみ
何人の人が涙を流しただろうか
そして何人の人が自らの生命を絶つただろうか

私は部落をつくった人
また部落を差別するすべての人を
決して許さない

私たちが流した涙は
いつか川をつくるだろう
そして部落差別と大きな悲しみを
水といっしょに流してくれるだろう
どこかへ消えてしまうだろう



私は解放の主体者として闘い続ける
部落差別解消の日まで

中学生の感性、中学生の本質、そのすばらしさを信頼し、一人一人の熱きものに感動しながら一日一日の営みがあった。部落問題学習に取り組む度、授業の最後に出てきた私の言葉は「ありがとう」だった。一人一人の生徒たちを励まし続けるために頑張っていくんだという思いでいた私であったが、いつの間にか私は生徒たちの頑張りや輝きに励まされていた。この記録をまとめたのもそうだった。絶対差別はなくなる、絶対この子らの信頼に応え頑張り続ける生き方をどんな困難な問題にぶつかろうが続けていく。そんな思いがいつも沸き起こってくる。その思いを確かなものにしてくれたのも3年B組の生徒たちであった。この3年B組の生徒たちとの出会いに感謝しながら、1991年度授業実践の記録として「よろこび」第1号をまとめた。



1991年度 板野中学校 3年B組クラス写真

この1991年度の取り組みについて綴られた佐野先生の文章がある。佐野先生は当時、私の隣のクラス、3年A組の担任であった。当初、全体学習に反対してきた佐野先生であったが、先生は見事に変容していく。その営みを綴った原稿は今も心を打つ。その原稿を引用させていただく。

※ ※ ※

昨年（1990年度）から学校をあげて部落問題学習に取り組んできた。今までの自分が部落問題に取り組んでどう変わったかということより、板野中学校に8年間勤務して、私自身が部落問題と真正面から相対していなかったことに気づかせくれたのが、第21回徳島県中学校同和教育研究大会に向けての日々であった。

私自身、同和地区生徒に必要なのは、十分な学力であり、一点でも一問でも多くテストに正解すること。そして、生徒たちの進路選択の幅を広げるためにも、教科の学習に力を注ぐべきだと信じていた。そのため、ゆとり・学活などは教科の学力補充に利用すべきであり、学力保障こそ差別解消の第一歩だと思っていた。またその思いの底には、自分自身の腹の底をさらけ出し、醜い差別意識に満ち溢れた自分の姿を生徒に見られたくないという自己防衛の気持ちがあった。

そして私が求めてきたものは、人から尊敬される職業につき、地位や名誉を得、部落差別から逃げていくことであり、本当に部落差別と向き合いたたかかっていくためのものではなかった。それは同和地区生徒にとっても地区外の生徒にとっても、本当の意味で生きる力となっていくような学力ではなかったことに初めて気づいた。

全体学習に取り組み出して2年目を迎え、学年も2年から3年へと進み、新しい学級でのスタートを切った4月、A子が生活記録にこんなことを書いてきた。「私は、部落に生まれたことをすごく恥ずかしいことだと思っています。それがどうしてかはわかりません。あの学習会の通知

をもらう時、なんかとてもいやな気持ちになります。この間友だちに、『なあ、あの学習会の通知みた？』と聞かれた時、私は心の中でドキッとしてしまいました。小さい時から、部落は恥ずかしいところとはだれからも言われていません。勉強しているときとか、周りの人からそう思わせられていると思います。なんかいつになったらこんな思いせんですむんだろうかと思います。」この文章を目にした時、私は愕然とした。

A子は、昨年より引き続き担任している生徒である。母親一人の手で育てられ、大きくなったら親孝行したいと願う優しくて明るい生徒である。私は昨年1年間、いったい何をしてきたんだろうか。何を見て彼女のすべてをわかったような顔をしてきたのだろうか。目の前で差別の重さにつぶれそうになっている子に何もできていない。そんな中途半端なことをしてきたんだという思いでいっぱいになった。

事実、昨年の私は、この部落問題学習においてまさしく傍観者であった。学年185名全員で行なう学習（全体学習）がいやでたまらなかった。中学2年生という思春期で何に対しても恥ずかしがる時期に体育館に入れ、まるでショーでも行なうかのように子どもたちを踊らせていく。教師の指導力・学級経営を比べあうような、競争のような授業などしたくなかった。しかし、現実には子どもたちは差別の渦の中にいる。どうにかしたい。そんな思いがほとぼりした。私も共に立ち上がり、共にたたかわなければと思った。

そんな思いの中で、6月25日の板野郡同和教育研究大会に向けての取り組みが始まる。全体学習を通して、仲間の熱い思いに触れ幾度となく揺さぶられていく。そして学年をあげて丸岡忠雄さんの「同和教育への希い」を学習していく中で、A子がある日、「先生、話があります。」と言ってきた。差別の現実にも必死に喘ぎながらも必死に立ち上がろうとする彼女の思い。どうすればこんなに苦しい思いをしなくてすむのかという叫び。彼女の揺れる思いは痛いほどわかった。

しかし、情けないことに私には彼女の思いを一人で受け止め、部落問題についての話をする自信がなかった。話はできたかもしれないが、彼女の心の奥底にまで届く話にはできないと思った。A子の思い詰めたような顔を見てたまらない気持ちになり、森口先生を呼んで話を一緒にしてもらった。

A子が言う。「先生、私がもし部落でない人と結婚したら、私は部落でなくなるんですか。」森口先生がそれに答える。「君が部落である証拠はどこにあるのか。周りの人間が君にそういっているだけでないか。明日から、佐野先生が自分は部落の人間ですと言い続けていったら、きっと周りの人間は、佐野先生が部落の人間と思うだろう。部落には政治的に利用され、差別され続け、それに抵抗し、たたかい続けてきた数多くの歴史はあるが、部落であるという証拠はどこにもない。君に今一番必要なのは、部落差別から逃げるのではなく、君を立派に育ててくれたお母さんの思いを受け継ぎ、差別をなくすために真正面から立ち向かってたたかっていくことではないか。」彼女はあくる日の生活記録に、目の前の霧がはれていくみたいですと書いている。

そして、6月上旬に行なわれた学年同和問題意見発表会で、同和地区の友が親の生きざまに触れ、涙を流して自分自身を語る姿にこんな思いを寄せてきた。「私は涙が流れるあの思いは痛いほどわかります。あの涙をすばらしいものだと思いたくはありません。涙は本当にこの世から差別がなくなった時にみんなで肩を抱き合い、喜びの涙として流したいんです。今の私には涙は存在しません。涙は私自身を弱くさせ、差別に負けそうになります。決してかわいそうの涙はいりません。ましてや欲しくもありません。」丸岡さんに出会い、森口先生に出会い、彼女は大きく成長した。

子どもたちは、こんなにまで差別の檻に閉じ込められている。差別と向き合い真剣に考えていく中で、生徒が差別意識を持っている自分自身のこと、親や家族のことを書いてくる。そんなクラスの生徒を目の前にして、私の力でどうにかしたいというこの思い上がり、生徒のためにしてあげるといふ私自身の思い上がりの生き方が打ちのめされたのが、板野郡同和教育研究大会での公開授業であった。

丸岡さんの「同和教育への希い」を通して、「かくす」ことから「なめる」こと、「歎く」ことから「怒る」ことへと自己を変革していったすばらしい生き方を学んだ。その授業が終わりに近づいた時、B男が心の底にあるものをぶつけてくるかのように語り出した。

「先生は何でこそこそ学習会の通知を渡すんですか。なぜ一言頑張って学習会に行きよと言わんですか。先生は、丸岡さんの差別から立ち上がった生き方を僕たちに説いてきた。言よることとしよることが違うじゃないですか。先生の言っていることは口先だけなんですか。」

20名近くの先生方が授業を参観していただろうか。顔から火が出るぐらい。この発言に打ちのめされた。私自身今まで差別の重さをどれだけ自分のものにしてきたんだらうかと思った。子どもたちの本当の思い、本当の苦しみをどれだけわかってきたのだらうかと思った。私の心の中にある部落の子どもたちを哀れむ、労わるといふ思いは、そのこと事態部落の子どもたちを低いもの、弱いもの、卑しいものとして差別しているんだということを見せつけられ教えられたように思う。

相手が触れられると傷つくであろうと、都合よく解釈し、そのことを避けてもなんら問題は解決しない。ごまかすのでない。子どもたちの本当の思いに触れ、自分自身も本当の自分をさらけ出さなければと思った。子どもたちの心の痛みを知った私が、勇気を出して声を大にして訴えたたかなければと思った。そして、まず私自身の差別意識をどう克服しようとしているのかを子どもたちに語らなければと思った。嘘ではない、ごまかしでもない、本当のことを語っていかなければと思った。

私はB男の訴えから、子どもたちに語れ、語れという前に、自分自身が部落問題に関わってどう生きてきたかを話さなければということにやっと気づいた。

11月19日、徳島県中学校同和教育研究大会公開授業での題材が決まった。「水平社宣言」何度、繰り返し読んでもわからない。どのような形で授業をすすめていったらよいのか、かいかよく見当が立たない。「証言全国水平社」の本を、水平社宣言讃歌を、全国水平社に関わるビデオを、水平社宣言に関連する部落解放の雑誌を、「荊冠の叫び」を……私がわからずして子どもたちに何が語れようか。むさぼるように資料を集め読みあさった。でもわからない。

そんなとき方向付けをしてくれたのが石原先生であった。石原先生の語られる言葉は暗闇を照らす一隅のあかりであった。石原先生の話の中で授業が見えてきた。そして、一隅のあかりは炎となり私の心に自信らしきものがわきおこってきた。あとは生徒を信じ突き進むしかない。

授業の前日、子どもたちに私はこんなメッセージを送った。私の子どもたちへの精一杯の思いだった。

今、私たちにできる差別解消に向けての行動は、手を挙げて自分の思いを語る事が中心になる。差別を憎みこの世からなくしたいと願うなら、手を挙げて自分の思いを言ってみよう。上手に言う必要はない。みんなの考え、思いを聞き、語る中から新しい勇気がわいてくるだろう。今まで3年A組の仲間と共に取り組んだ部落問題学習を誇りとして、自分の思いや願いをしっかりと

語っていこう。先生も頑張る。みんなも頑張る。頑張って、頑張り抜いて、板野中学校で燃やした解放への炎を参会の先生方の心にともそう。

「今のみんなはそれができる！」先生は信じています。

11月19日、徳島県中学校同和教育研究大会の日、たくさんの先生が見守る中、子どもたちは自分の思いをぶつけていった。プレッシャーなどを感じさせぬ、気迫のこもった授業であった。生徒たちの熱と光がほとばしった。授業後A子がこんな感想を書いてきた。

「とても緊張して、なかなか手が挙がらなかったけど、最後の私の一番みんなに言いたかったところ、聞いてほしかったところを一番に発表しました。はじめは、胸がいっぱいになって、涙をこらえながら自分の意見を言いました。そして、K子やM子の意見を聞いて、私はまた胸がいっぱいになって涙を必死にこらえました。見に来ていた人の中にも涙を流す人もいました。けれどC子の詩にもあったように涙を流すだけはいけないと思う。みんなとやってきた全体学習の団結を心の糧として、私は強くなりたいです。私が強くなれた時、その時は、もう周りの人、世界が変わっていると思います。高校生になっても友だちを大切にしたいです。悲しみが喜びに変わるまで……。」

あんなに学習会に通知にこだわり、部落を恥ずかしいとまで言っていたA子が、たくさんの先生、同級生の前で胸張って部落を語る、自らを語る。そして自分は差別と向き合いたたかっていると語った。彼女をここまで成長させたものは何かと考えてしまう。

徳島県中学校同和教育研究大会の公開授業、子どもたちの心を大きく揺さぶったM子とK子の発言。この二人の発言は、私が次の課題として考えていかなければならない発言であった。二人の発言を紹介する。

M子「私はK子に言いたいんだけど、私は前に、私は部落出身なんじよと言ったでしょう。そのとき、K子はそんなん気にせられんよ。部落と関係なしにM子は私の友だちじゃとって私を勇気づけてくれました。私はその時のK子の言葉を嘘とは思いたくありません。」

K子「M子に言った言葉は、絶対嘘でないし、M子は私の大切な友だちじゃけん部落とかで泣いてほしくない。私は絶対部落差別は許さんし、友だちを泣かすような部落差別はけちよんけちよんにしてやりたいし、勉強しまくって完全になりたい。」

よく生徒の発言の中に、部落とは関係なしにという言葉が出てくる。今は関係ないかもしれないが、近い将来関係が出てきた時、はたしてどうなるのだろうか。その時がきたら態度を豹変させるのだろうか。K子のようにM子と共に立ち上がり、差別解消に向けての行動がはたしてとれるのだろうか。

また、部落のことなんて気にしていないという発言にホッとして、それで終わっている。それで満足している同和地区生徒もいる。私は今こそ、丸岡忠雄さんの言葉にあるように、「真実をしかと見据える勇気を本物を見分ける確かな眼(まなこ)をもつ」その必要性を痛感する。

部落の話が出たら、無関心を装い、相手の話に無言の同意をする。そんな今までの私の生き方は、一生懸命心を開き差別への憤りをみんなに訴えたM子やK子の存在を否定することなんだということを心に刻みつけ、これからのさまざまな部落問題の研修会のおいてもM子やK子の気持ちを代弁していかなければならないと思っている。

昨年度(1990年度)5月の「洗染一揆」の学習から始まった学年185名全員で取り組む部落問題学習。卒業によって形として終わるが、子どもたちに心の中に絶えず生き続ける学習と

なったであろうか。私は子どもたちの頑張りをいつまでも励まし続けることのできる人間でありたいと思う。

このみんなで取り組んだ部落問題学習は、これからの私自身の生き方を問い続けていくと思う。大会のための授業ではなく、生徒・学校は変わっても、ずっと生涯取り組んでいきたい。子どもたちが自分の隣で共に頑張った仲間を高校へ行って裏切るような、売るような生き方だけはしないと誓ったように、私自身も185名の子どもたちとした全体学習を心に刻みつけ、たえず自身自身の差別意識を洗い続けるような生活を送っていきたい。

最後に、実践の少ない私を温かく時には厳しく最後まで教え導いてくれた先生方に感謝の気持ちでいっぱいだ。この仲間、この何でも話し合える関係があったからこそ頑張れたように思う。そして、3Aの子どもたちに心からと言いたい。

「みんな、ありがとう。あなたたちが私の先生でした。私の目を覚ましてくれたのはみんな一人一人でした。」

3年間の思い出を短歌であらわそうと言った時、M子が次のような一首をくれた。

「思い出は 涙を流したあの授業 今も忘れぬ心の絆」

今、信頼という堅い絆で結ばれた3年生の仲間たち。この世から差別という二文字がなくなるまで、共にたたかい続けよう。

5 板野中学校 ～全日本中学校道德教育研究大会特別公開授業「ナイン」の授業～

「ナイン」の授業も生涯忘れることはない。この資料に重なって私を支え励まし続けてくれた先生方の姿が思い出される。特別公開授業に向けての苦しみが私に人間のあり方や生き方を教えてくれたように思う。私を取り巻く多くの人々の励ましや支えの中で生かされているんだということを感じ続けた全国大会までの日々であった。

「ナイン」という作品、この資料なら私の思う授業ができるという確信がいつしかもてるようになった。生徒たちは新道と生徒たちの暮らす板野町を重ねて思いを語っていく。H夫が、「このナインの資料は何か僕たち3年B組にあてはまると思います。これから徳島県も板野町も発展していくと思うし、やっぱり昔の板野がよかったなあと思うことがあると思います。僕たちは中学生だけど、これから高校へ進学したり就職してでも、こんなナインのような関係になっていきたいなあと思います。」と語る。そのH夫の思いにこたえてM夫が、「H夫君が言ったように、板野町とか徳島県とかもだんだん変わっていくと思うんです。変わっていくことによって、昔の方がよかったなあという気持ちも残ると思うけど、大きくなってからも周りにこんな仲間がいて、互いに支え合って生きていくことができたらすばらしいと思います。これから高校へ行ったり就職したりして、周りの仲間に自分の心を開いて話のできる人がいなかったら差別されるかもしれません。だけど、今はこの周りに仲間がいるからどんなことがあっても頑張っていくことができます。実際、将来負けそうになったときも、今のこの仲間に相談できるような関係をつくっていきたいと思います。」と自分の思いをおつけていく。

生徒たちは今までの部落問題学習を土台として、作品「ナイン」に寄せる思いを語っていく。

また、この授業にはさまざまなドラマが生まれた。私が生徒たちの「ナイン」という資料を配布したとき、Y子という生徒は、私にその思いをおつけるように訴えた。

「先生、どうして部落問題の学習をしないんですか。全国の先生方に同和教育の大切さや、部落

問題学習に取り組んだ私たちの喜びをわかってもらえるチャンスじゃないですか。」

この言葉は、本当にうれしかった。この生徒たちとなら闘えると思った。そのY子は「ナイン」の授業の中でもその思いを語っている。

《私たちがこの富田中学校にきて授業をすると聞いたとき、私たち3年B組は部落問題の学習をするもんだと思っていたのに、こういう直接部落問題に触れない資料をするということでもちよとやりにくいなあと思っていたけど、結局部落問題の学習も道徳の学習も一緒に人間の生き方につながっているものだから、みんないろいろな意見が出たと思うんです。結局人間というものは支え合ったりして生きていかなあかんもんやし、だから、私は社会の流れとかに流されんようにして今までのみんなとの関係を大切に守りたいんです。私にたくさんの子が自分の一番つらかった部分だった部落に生まれたということを書いてくれたけど、私は絶対にその子たちを裏切ることがないように、その子やが西日に照らされて苦しむようなことがあったら、さっと日陰をつくれるような人に私はなりたいと思います。》

そのY子の思いにつなげてS子も語る。

《今までの部落問題学習で築き上げてきたクラスの信頼関係と平行してこの「ナイン」について考えていくと、ナインの奥に流れているものがよくわかってきたんです。やっぱりこの資料「ナイン」だけで考えていったら、今のような発表とか部落問題学習と関わる私の発表とかはなかったと思います。そして、みんなが心をつなげて板野中学校全員で部落問題について学んできたからいろんなことが考えられて、こうやって発表ができるんだと思います。》

全日本中学校道徳教育研究大会の特別公開授業、生徒たちは私の思いを担いで共にたたかっているように思えた。繰り返される発言の中で、私は「ありがとう」という思いをかみしめながら、生徒一人一人の発言を体全体で受けとめていった。生徒たちの中には同和教育の営みをわが生命の営みとして訴え続けた私の思いがしっかりと入り込んでいるんだと思った。

この授業は、それ以後の私に大きな影響を与えている。生徒のうちにある豊かなものをどのようにつなげていくか、授業はまさしくドラマだということを実感した授業であった。大会前日に生徒に配布した思いを掲載していきたい。

《大会前日》

- ・10月31日、全日本中学校道徳教育研究大会、「ナイン」の学習をすばらしいものにしよう。
- ・中学2年生より取り組んだ全体学習の成果を十分に発揮しよう。
- ・堂々たる姿勢で胸を張って、しっかりと前を見ずえて語っていこう。

(下を向くな、ぼそぼそ言うな自信をもって胸を張れ)

- ・「よく聞き、よく話す」を互いの合言葉として頑張ろう。

(仲間の発言に一人一人の発言を重ねていこう)

- ・自分の考えをしっかりと語っていく。

(下手でもよいからていねいに自分の考えを述べること)

- ・発言で自分を育て、学級を作る。

(正解が大切なのではない、自分としてのしっかりとした考えを言うことが大切なことだ)

・富田中学校へ行く、自分たちはだれもしたことのない授業をするんだという誇りと自信をもって、富田中学校において先生方に対する挨拶や応答も堂々とやって行こう。全国大会の堂々たるみんなの姿が、みんなをより大きなものとしてよりたくましく育てていく。

- ・授業が終わったら自分の思いのすべてが表現できるような感想がもてるように、授業の一場面

一場面に自分の思いを重ね、自分の思いをぶつけていこう。

(互いの存在を讃え合い、よくやっただと言える授業にしよう)

・長い人生の中でもめったにない檜舞台を経験する。みんなが主役であるという誇りをもって頑張りたい。

・新道少年野球団が優勝戦を戦ったように、3年B組が一丸となって試合(授業)をやっけていこう。そして、堂々たる準優勝を勝ち取ろう。

※

※

※

全日本中学校道徳教育研究大会の特別公開授業等の授業者として、全日本中学校道徳教育研究大会運営委員会の事務局として、この「ナイン」の授業は、自分自身よく頑張ってきたものだと思う。幾度か挫けそうになったり、投げやりになったこともある。そのときの私を励まし支えてくれたのは、私の周りにいるすばらしき人々である。この1年間程、人の支えや励ましを有り難く感じたことはない。私は多くの人の励ましや支えの中で生きていることをしみじみと感じ続けた1年である。当時の教育記録(週録)にも、その思いが綿々と綴られている。

《全日本中学校道徳教育研究大会を間近にひかえて、多くの先生方の励ましが嬉しい。ただただ感謝するだけだ。背中に徳島県中学校道徳教育研究会を背負っているという思い。プレッシャーは大きい。しかしそのプレッシャーよりも遙かに授業をやらせてもらえるという喜びの方が大きい。多くの人々の支えの中で生きていること、励まされていること、特に板野中学校の先生方には感謝の言葉しかない。いろいろな面での支えや励ましを受けていることが有り難い。我生かされて生きるなり、感謝の中に人生の峠を越える。》

またさまざまな雑音の中で揺れたときもあった。教育記録(週録)の次のページには揺れる思いが記されている。

《全日本中学校道徳教育研究大会が近づいてくるイライラしてくる。どうしてこんなに苦しまなければならぬのか。大会事務局と大会授業者、「お前、ほんまにようやるのお。」「よっほど授業が好きなんじゃなあ。」さまざまな雑音が入ってくる。「誰が好きですか。」「何でここまでせないかんのか。」弱い自分が顔を出す。

しばらくすると、また気を取り直して、「こんな檜舞台に立たせてくれることは最初で最後かもしれない。」「こんな授業は頼んでもやらせてもらえるものではないんだ。」「3年B組の生徒たちと一生の絆となるような授業で答えを出そう。」そんな思いを自分に言い聞かせるように自らを励ます。揺れに揺れている。

夜、書物を整理していると、何通かの手紙が出てくる。瀬戸中学校で出会った生徒からの手紙、藍住中学校で出会った生徒からの手紙であった。その手紙の一つ一つを読み返していく。その生徒たちと歩んだ頃が当時の授業と重なって、繰り返し繰り返し頭の中に浮かんでくる。私の言葉の一つ一つを反芻するように、私の授業を支えとして頑張っている生徒の存在が嬉しくてならなかった。このために日々の授業、人間を学ぶことをやっているのではないか。一時の感情に流されて大切なものを見失ってどうする。「またいつか先生の授業を受けてみたい。」と記してくれたAさん(瀬戸中出会った)たちの言葉がたまたま嬉しかった。私はこの生徒たちの存在がある限り、決して負けない。挫けることもない。天命に安んじて人事を尽くす。》

「全国大会では、あなたの思いや願いの滲み出た授業、森口健司の道徳授業を見せてください」多くの仲間が私に語ってくれた言葉だった。こんな仲間がいるから、どんな厳しい峠と向き合っても、生きがいや喜びを感じて生きていくことができるんだと思う。人を知ること、人と出会う

こと、それが人間として生きる喜びなんだ。そんなことをしみじみと実感したのが、「ナイン」の授業であった。

この授業の終わり私は言葉を失った。「今日みんなはすごく輝いていたと思います」という生徒の言葉に答える言葉が私には見つからなかった。言葉では無理だと思った。私は息を飲むようにこの授業の感動をかみしめながら、黒板に大きく『3年B組の絆』と記した。授業が終わったときに会場から沸き起こった拍手、そして生徒たちが退場するときに再び沸き起こる拍手。私はこの生徒たちと闘ったんだと思った。この資料「ナイン」を私に提起し、私を支え続けていただいた大川雄哉先生が、「道德教育」N0.389（明治図書）に「わたしの感動した道德授業～潮満ちてくる感動～」として授業の展開と情景を著わしてくれた。その原稿を引用させていただく。

※

※

※

(1) 潮満ちてくる感動

1991年10月31日、12時50分、全日本中学校道德教育研究大会徳島大会特別公開授業が徳島市富田中学校の体育館で700名を超える参観者の前で始まった。

公開学級は板野中学校3年B組、男子19名、女子18名、担任は森口健司教諭、主題名は「生きる絆」、資料は井上ひさしの「ナイン」、第2時の指導である。

前時の確認を終えて本時の指導に入る。森口教諭の応接の見事さ、生徒の発言の多様さ鋭敏さ。約1時間の授業に生徒はもちろん、参観者一人一人がかたずをのみ、我を忘れ、ひきこまれていった。森口教諭が「3年B組の絆」と板書し授業が終わって、ようやく潮満ちくるような感動が胸いっぱい広がってきた。この感動は一体どこからくるのだろうか。多少その検証を試みたいと思う。

(2) 確かな主題構成

井上ひさし作「ナイン」は道德の時間に取り扱う資料として長文に属する。長文の場合、最も注意しなければならないのが資料分析である。長文であるがために、資料のもつ特質や主題を見失い本質を把握しきれない危険性が終始つきまとうのである。

指導案の「資料について」にも書かれているように資料の主題は二つあり、その第一は、新道少年野球団の結束であり、その第二は、移ろいゆく新道商店街への限りない愛惜である。この二つを重ね合わせてみると、新道少年野球団の結束が今なお強固であるのは、単に友情や恩に報いるだけのものではないことが明らかになってくる。

資料を通して最大の山場は「だまされていても許し、正太郎に感謝さえする英夫の気持ちの吟味」である。第1時、第2時をあげてこの一点に収斂するに、第1時に資料の第2の主題である新道商店街への愛惜を、第2時に第一の主題である新道少年野球団の結束、特に英夫と正太郎に照準を合わせたのは、論理的であり納得される適切な授業構想であろう。殊に第2時の指導の組み立ては、ナインの結束を資料に従って理解し、次にナインを裏切っている正太郎を否定させた上で、正太郎を許し感謝さえする英夫の気持ちを吟味させている。授業の先行きを見通した見事な組み立てである。



第25回全日本中学校道徳教育研究大会「メイン」の授業

(3) 教えることから共に創ることへ

授業記録を一見してわかることは生徒の発言が教師のそれに比して圧倒的に多いことである。概算ではあるが生徒の発言量は約92%。森口教諭はわずか7～8%である。その7～8%の言葉は「ナインの気持ちについて話し合いたと思います」「漆原君の発言につなげてほしいと思います」「みんなが思うことを語ってほしいと思います」というように一貫して生徒の発言を中心に授業を進行させている。このような教師の姿勢や生徒の言葉に謙虚に耳を傾ける日常の教師の姿が自らを語る生徒を育てると思う。

知識や理解の点で教師は確かに生徒より数段優れている。しかし体験においてどうだろうか。例えば、両親の離婚あるいはいじめ、人権無視等々、現代社会のひずみをもろにかぶっている生徒の中には教師以上にすさまじい体験保持者が増加しているように思えるのである。そのような生徒を前にして、道徳や学活の時間に教師が教えるという意識をどうしてももてようか。むしろ生徒から学ぶべき点が多くあろうし、共に週1時間の道徳の時間を創りあげていく教師のまさに基本的な姿勢が今求められているのではないかと思う。

さて指導案の山場「騙されていながら、許すばかりではなく、英夫はなぜ正太郎に感謝するのかを考える」それを一歩踏みこんで「その気持ちは今でも心のどこかに残っていると思います。だから……」という英夫にはどんな思いが込められているのかを考える場面において、森口教諭はどうであったか。

授業記録に「正太郎のしたことは絶対に悪いことであって、人として許せないことであるにもかかわらず、英夫は許すだけでなく『一人前になれたのは正ちゃんのおかげだ』と正太郎に85万円という大金を騙し取られておりながら、正太郎に感謝までする。その許すだけでなく、感謝までする英夫について、みんなが思うことを聞かせてください」とあるように「騙されていながら、許すばかりではなく、英夫はなぜ正太郎に感謝するのか」への基本発問で押さえるところ

「正太郎の行為は人間として許せない絶対に悪いこと」を前提条件として確認して「騙されていながら、許すばかりではなく、英夫はなぜ正太郎に感謝するのか」に移行している。これは実に重大な点で「にもかかわらずなぜ感謝するのか」という発問が生徒の価値意識を根底から揺さぶ

り、問い直すことになってくる。

基本発問の第一の要件は考え抜いた研ぎ澄まされたものとするが、「騙されていながら、許すばかりではなく、英夫はなぜ正太郎に感謝するのかを考える。」の基本発問はまさしくその要件を満たし、生徒の話し合いをより深いものとしている。授業記録にもあるように、その後の森口教諭は終始聞き役である。「騙されていながら、許すばかりではなく、英夫はなぜ正太郎に感謝するのかを考える」は生徒の発言を触発した格好の基本発問であろう。

「騙されていながら、許すばかりではなく、英夫はなぜ正太郎に感謝するのかを考える。」

「『その気持ちは今でも心のどこかに残っていると思います。だから……』という英夫にはどんな思いが込められているのかを考える」の基本発問と生徒の発言による授業の推移は生徒まかせのように見える。しかし的確に授業が進行しているならば基本発問の力であろう。道徳の時間における話し合いの理想は「成り行き」である。一見成り行きまかせに見えながら確実に授業が成立していく、つまりねらいが達成されていくことが理想とするならば、水面下においてむしろ教師の大きな力が必要となる。なぜならばその成り行きを作っているのは教師だから。

森口学級の授業に、共に授業を創りあげていく教師の基本的な姿勢と授業の成り行きを作っていく教師の力を感じたのは私だけではないと思う。

(4) ひたむきに1時間を生きた生徒

徳島県中学校道徳教育研究会は、話し合いの質と量の深まりは最終学年の3年生において最高になることを目標にしてきた。それを確実に実証したのが今回の特別公開授業であった。

資料「ナイン」は高校現代国語1年にも載せられているが、はたしてこの授業のように的確なねらいの把握と深化が高校1年でもできるのか、と非礼を承知で思うのである。

第2の基本発問「ナインの気持ちを問う」の話し合いで、漆原、藤田の「試合だから勝ちたい」殊に漆原は友情をからめて、藤田は捕手としてキャプテンとして投手の疲れが一番よくわかるからの理由で発言している。これに対して井上、中山はナイン全体のことを考えているのであって勝敗だけでないと反論している点、実に興味深い展開であった。つまり話し合いの深まりには大別して二通りある。一つは正反の対立であって合に接近する場合。もう一つは対立するよりも微妙な差を明らかにしながら深まる場合である。今回の授業の深まり方は後者に属すると思われるがそれだけに生徒自身が自分の拠って立つところ、価値意識を明確にしなければならぬむづかしさがある。しかしその点を十分に克服している生徒たちであった。

第3の基本発問は「正太郎を許せない」ことを確認する発問であるが、正太郎を許せないとしながら同情を禁じ得ないという発言、同情の余地なしという発言を経て、問題の基本発問「騙されていながら、許すばかりではなく、英夫はなぜ正太郎に感謝するのかを考える。」「『その気持ちは今でも心のどこかに残っていると思います。だから……』という英夫にはどんな思いが込められているのかを考える」へと続く。

基本発問「騙されていながら、許すばかりではなく、英夫はなぜ正太郎に感謝するのかを考える」では、佐々木「正太郎のやさしさや、ナインでつくった思い出を嘘にしたくないという気持ち」土内「人間として大切な人間の結び付きを失いたくない」小川「感謝という英夫の思いが正太郎を訴えさせなかった」というように生徒の反応は期待する通りすでに深い。

そして、井上「正太郎を否定することは自分の心の支えをなくすことになり、正太郎を美化することによってそれを避けた」というすごい発言につながっていく。その上、中山の発言「憎ん

でいるのに感謝までするという意味がわからなかったけど、今まで取り組んできた部落問題学習と重ね合わせたとき、私はハッとしました。英夫と正太郎の関係は、私たちが部落問題の学習で築き上げてきた関係とよく似ていると思うんです……」が話し合いを身近なものにした。実際、話し合いがこれまでに深化するとは参観者はだれも予想しなかったであろう。

道徳教育と同和教育について昨年はじめ、私はある場所で相違点でなく接点を求めねばならない旨のことを話す機会があったが、しかし生徒の発言を聞いていると、そんなことを言っているのは教師の方だけであって、人間としての生き方という前では接点などというちやちよなものではなくすべて包含されたものであると生徒から教えられたような気がする。

発言の質と量、そして深まりが見事であったその裏には生徒一人一人が資料ナインを自分自身や自分の周辺に引き寄せているからで、その例として、井上(男)「これから板野町も発展していくと思うし……」大森、広瀬など多数の生徒が資料を通して3年B組を見つめていた。

森口教諭が3年B組の絆と板書して授業は終わったが、静かに潮満ちてくるように感動が押し寄せてきた。

井上(女)「今日みんなはすごく輝いていた」という最後の発言。

横山調査官「道徳の授業以上にすばらしい学級経営を見せてもらいました」と授業後そっと私にもらした言葉が今も心に残っている。

※

※

※

この授業は、まさに感動の連続だった。授業をやらせてもらえた喜びに浸り続けた授業だった。そしてその授業後、その授業の指導助言として全国大会に参加されていた文部省の道徳教育担当の教科調査官の横山先生が是非とも話がしたいということで、別室で約1時間ほど話をした。横山先生は言われた。「いつまでもあの子どもたちとつながってくださいよ。そして本当に部落差別をなくしていくために頑張ってくださいよ」そんな会話の中で、さまざまな思いを語ってくれた。「私は兵庫県の人間なんだ。学生時代から部落差別についてさまざまな怒りを持ってきた。まだまだ差別の現実は厳しいものがある。大切なのはこれからなんだ。あの子らが傷ついていくことのないように、しっかりとつながっていく、見届け支えていく関係を持ってくださいよ」とも言われた。私は横山先生の言葉に胸がいっぱいになる。横山先生の思いがたまらなくうれしかったし、道徳教育の教科調査官に対するイメージが大きく変わっていった。このとき道徳教育とは、まさに人間教育そのものなんだと思った。このときの横山先生との出会いが、1994年の文部省中学校道徳教育読み物資料「スダチの苗木」と「峠」の誕生へとつながっていく。

6 板野中学校・全体学習に取り組む教師集団 ～1994年の取り組み～

1994年度、私は初めて1年生を担当する。1年、2年、3年と部落問題学習がどのように実践されていくか。そのスタートの年であった。1年5クラス、5回の全体学習の実践が「峠を越えて」ー1994年度全体学習・輝ける日々にまとめられているが、その一つ一つの授業が私にとって強烈なものだった。この冊子には私のクラスB組が公開授業を実施した第1回全体学習の指導案と公開授業、全体授業の記録、A組が取り組んだ第4回全体学習の全体授業を掲載している。いずれの授業も、私に強烈なインパクトを残してきた。1回1回の全体学習が、私たちに残してきたものをしっかりととらえ、これからの実践に生かしていきたいと思う。

E組の担任であり、本年度板野中学校に赴任してきた三木先生が指導案の主題設定の理由に綴

った思いは、部落解放は自己解放であることを明確に示してくれた。彼自身の心の揺れ、彼自身の差別とのかかわりを綴った指導案の抜粋である。

※ ※ ※

第5回全体学習1年E組公開授業【指導案】主題設定の理由（抜粋）

この10ヶ月の間に、板野中学校の先生方や生徒たちと、全体学習などのいろんな場面で話し合う中でわかったことがある。それは「語る」ということの重要性である。

『部落問題学習において、生徒たちから意見を引き出そうと思えば、まず教師が自らの部落に対する「思い」を語っていくことだ。それをしないと、生徒たちは、自分の底にある本音の部分や言いにくい部分をみんなの前で言えるはずはない。教師が自分を出していかないと生徒たちの本音の部分は聞けない。自分自身が今まで出せなかった部分を出して変わっていくことで、生徒たちも変わっていけるということである。つまり、部落問題学習は、教師が変わっていくための学習であり、そこから生徒たちがどう変わっていくかという学習である。』

そんな全体学習に対する説明をはじめて聞いた時、自分にこんなことができるのか、今までどんなに親しくしてもらった人にも言えなかったことを生徒たちの前で言えるのだろうかという不安、それを言ったところで本当に何かが変わっていくのだろうか、それどころか信頼をなくすことになりはしないか、という疑心暗鬼の気持ちでいっぱいになっていた。

5月19日は私にとっても1Eにとっても最初の全体学習の日であった。

《帰り、YちゃんとKちゃんまで帰っていて、全体学習の話になって、Yが「お母さんとか部落の子と遊ばれんとか言うん？」って聞いてきたから、「ううん、別に聞けへんよ」って返事した。そうしたらYちゃんは、「私の家は、お母さんが遊んでもいいけど、結婚するんは部落の人と結婚したら将来死ぬまでずっとかかわってくるからあかん」って言うらしいんよ。それにYちゃんは親にあんまり反抗したりせん方やから、当たり前のように思っとんよ。私が「おかしい」みたいにしても、「Oちゃんもお母さん反対すると思うよ」って言う。でも反対されても私はおかしいって言う。そんなんだからいつまでたっても部落差別はなくなるんだ。部落に生まれた人にはなんの罪もないのに……。みんな口では「私は差別をなくしたいから1人でもがんばっていく」みたいに言うのに、実際には親の言いなりなんて情けない。お母さんやの時代は、差別せんとこうっていう『ひかり』の授業はなかったから分からない、知らないのは当たり前。だから間違う。間違ったことは教えてあげななおらない。お母さんだけでない、私だって、先生だって、友達だって間違う。けれど教えてあげな、おかしいと声をかけな、絶対に差別はなくなる。私は間違っているところ、おかしいって遠慮せんと言っていきたい。部落に生まれなくてよかったって思わないで、部落でないからもっとよく知って、考えて、なくしていきたいと私は思いました。》

このような熱い決意に満ちた感想を多くの生徒たちが生活ノートに書いてきた。去年までのような決まった答えの方へ導いていくような授業はもう決してすまいと思っている。クラス全員が下を向いて黙っている、そして指名されてやむを得ず差し障りのないことを言う、そんな授業にしては何の進歩もない。ある全体学習の後の研修会で、部落解放同盟徳島県連・中部ブロックの永井議長の言われた言葉が、今も心に強烈に残っている。

「先生方は自分の専門の教科があつて、その免許があるから、その授業をプロとしてやっているわけでしょう。では、部落問題についてはどうですか。どの先生が部落問題を教えてもいいという免許を持っているのですか。みんな無免許で部落問題の授業をしているのだから、中途半端に

やってもらうと、本当に差別を増やしているだけになってしまいますよ。」

というような内容であったと思う。私には部落問題学習を授業していく資格があるのだろうか、涙が出そうなほど考えさせられた強烈な言葉であった。しかし1年E組を担当した以上、資格があるかないかなどを考えている場合ではない。わがクラスにいる部落差別に苦しんでいる生徒を解放していかねばならない。そのためには自分自身を解放していかねばならない。それがその時に出した自分の答えであった。

そのために、まず、私自身のことから綴っていきたいと思う。

『私は〇〇町生まれで、対象地域のないところで育った。小さい頃は「部落」という言葉や、どこが部落であるかということは知らずに育った。しかし、祖父や祖母からは、

「遠くの方には恐いところがあるんですよ。」

と言われた記憶がある。小・中・高・大学と進学するにつれて、いろいろ部落問題学習の授業を受けてはきたが、そこで身につけてきたものは、「差別はいかん」ということだけのように思う。学習会が行われているということを知ったのも教師になってからである。今年、板野へ赴任するとき母に、

「〇〇へ渡る橋は通られんでよ、道が狭いけんな。」

と言われた。何を言っているのかはすぐにわかった。

「なんで。」

「事故したら困るで。」

「事故はどこでも困るで。おかあはんは部落の人と事故するなってことを言よんだったら、それは大きな間違いでえ。部落の人が部落しか通ってないか。どこでも通いよるし、部落の人とどこで事故するかわからんのよ。だいたい部落の人であろうがなかろうが、事故はしたら困るんで。」

「〇〇は世間を知らんからそんなことが言えるんよ。部落の人は集団になってやってくるで。恐いで。」

「おかあはん、おかあはんは部落の人と事故したんで。」

「□□のおっさんが事故したとき、ほんまに困ったって言よったでよ。」

「でも、それは聞いた話だろ。みんながそうやって聞いた話を信じて偏見をふくらましていくから、部落の人と関わると何言われるかわからんという理由で差別をするから、部落差別はいつまでたってもなくならんよ。」

「もうええわ。〇〇の好きにしい。でもな、事故しても知らんよ。そうやって心配して言よることを邪険にしたらええんじゃわ。」

というような話になって喧嘩になってしまった。同じような喧嘩を何回もしてしまった。

ここで両親の話をしておこうと思う。

つい最近まで、私の母は家政婦を職業としていた。母は同じ町内から、農家の長男である父の元へ嫁いできた。「家」を守っていくことに重きを置く祖父と祖母、兼業で農業を営む父の中で、時には外で働きながら、そして農業も父とともにしながら、私と弟の二人の息子を育ててきた。多くの女性がそうだと思うが、私の母も「家」を背負い、嫁と妻と母という立場の中でずいぶんつらい思いをしてきた。私が高校1年の時から3年間の父親の入院があって、大学入試の時に父親は亡くなったのであるが、その間も、母は、父の面倒を見ながら、私や弟の世話も祖父や祖母の世話もこなしてきた。

その父の死の時ほど両親のすごさを感じたことはない。私は、とにかく、家の状況がどうであろうと、大学へ進学するのは県外へと思っていた。県外で一人暮らしをし、自立して生活できることを証明するのだ、などと言って、本当は誰の目も何のしがらみもないところでのんきに遊びながら暮らそうという甘えた気持ちであった。母は、父の入院があるからぜひ県内の大学へ、と私のその考えを許してくれなかった。それを高校3年の12月、共通一次テストも押し迫った頃に許してくれた。

「父ちゃんがな、〇〇の好きなようにさせてやれて。ほんまなら、わしが元気で仕事ができよったら、〇〇の好きなようにさせてやれるんやけど、苦勞するんを承知でそうしたいんなら行かしてやれて言うてくれたんでよ。だから、共通一次が終わるまでは病院へ来んでもいいからな。勉強一生懸命しいよ。」

と書いてくれた。うれしくて舞い上がった。父の入院していた病院は私の高校への通学途中にあり、病院へ寄ることがそんなに時間的な負担になることもないのに、その父と母の言葉に甘えていた。父がガンであることは私にも知らされていたのに。それで、年が明けて1月15、16日の共通一次テストの日までの1ヶ月あまり、病院へ父の様子を見に行くこともなく、勉強に明け暮れた。テストが終わり、久しぶりに父の様子を見に行くと……。個室へ移っていた。ドアを開けて父の姿を見るなり、涙が出てきた。このあいだ見たときとは全然様子が違っていた。

「父ちゃん、今テスト終わってきたよ。」

うつろな目で父はうなずいた。私は思った。

「父がこんなに苦しんでいるのに、僕は何を甘えたことを言っているんだろう。病院へ来んでもいいっていうんは、父の悪くなっていく姿を見せては大事な時期に勉強に集中できんようになるという思いやりだったんだ。それに甘えて、僕は自分のことしか考えてなかった……。」

生まれてこれだけ泣いたことがないくらい、涙が出て止まらなかった。

「父ちゃん、母ちゃん、僕、徳大へ行くわ。ごめんよ。」

それから4日後の1月20日に父は亡くなった。父と母は、死による別れを前にしても、私にわがまを言わせてくれていたのである。

この後、母はこの3年間の病院での父の世話の経験をもとに、家政婦の仕事に就き、病院に入院しているお年寄りの面倒や病人の世話を本当に献身的にしていた。最近は夜泊まり込んで仕事をするようなことはなくなっていたが、家政婦をし始めた頃は、よく夜も泊まり込んで仕事をしていた。病人の世話の仕事ばかりでなく、ホームヘルパーとして働くときもあった。父の死後10年あまり、嫁としての立場はそのまま、本当によく我慢しがんばっている。母のすごいと思うところはその家政婦の仕事に誇りを持っていたことである。

「この仕事は、お父さんを通して、神様が私に与えてくれた仕事かもしれんなあ。本当にやりがいのある仕事だよ。」

母はこう言っていた。全然この職業を恥ずかしいなんて思っていない。

私もこんな母をすごいと思う反面、母の職業を人に堂々と言えないと思う意識があった。これまで職場などで書いてきたいろんな書類の母の職業欄に、今は家でだれもやっていない「農業」と書いてみたり、母が昔やっていた「事務員」と書いてみたり、1回も本当の「家政婦」と書いたことはなかった。自分の中に、この「家政婦」という仕事に対して恥ずかしいと思う気持ちがあり、それは、母はすごいと思う反面、差別しているのものであるということにようやく気がついた。自分自身、母の仕事に対して差別意識があるにもかかわらず、母の部落に対する差別意識には腹

が立つ。自分はつらい思いをしてきて、また病気でつらい思いをしてきた人とずいぶん接してきたはずであろうのに、なぜ部落差別でつらい思いをしている人がいることに関しては理解しようとしなないだろうか。私がこういうふう思うのは、教師という職業に就いているんな差別問題に関わっているからなのだろうか。教師をしていなければ、母と同様の考え方をする人間になっていたのだろうか。

私が今までで自分の中で一番部落を意識したのは結婚の時である。それまでは、学生時代に部落問題の授業を受けても、教師として部落問題学習の授業をしても、自分には関係のない遠いことのようなとらえ方をしていたように思う。人が部落の出身であろうがなかろうが、そのことが人を判断する基準にはならないと自信を持って考えていた。しかし、結婚しようと決意した時から、家族の誰かから

「○○さん（私の妻をさして）は部落の人と違うんで？」

と聞かれるのが非常に恐かった。もし私の妻が部落の出身であれば、私は反対するであろう家族に対してどのように説得しただろうか。そして説得し切れただろうか。しかし、結婚式までに、また結婚式が終わってからも、そんな話は出なかった。妻の里は阿南なのだが、私の祖父、祖母そして母は、遠くの阿南のどこが部落でどこが部落でないかというようなことを知っているのだろうか、私はそんなこと知らないのに、それとも聞き合わせか何かをしたのだろうかかと疑う気持ちになってしまう。

結局、私がこういうふう考えていること自体が、私の部落に対する差別意識なんだと思う。私が育った家の中では、私だけは部落差別する人間ではないと思っていたが、部落を強烈に意識してしまう自分があった。私はその時まで、自分の差別意識をすべて家族に押しつけて、自分だけはきれいな人間だなどと、とんでもない思い違いをしていただけなんだと思う。こんな自分を変えていきたい。部落を意識しない人間になりたいと思う。』

※ ※ ※

1年C組の担任であり、第3回目の全体学習公開授業に取り組んだ住友先生も、三木先生と同じく本年度板野中学校に赴任したばかりである。第4回目の全体学習の全体授業（318頁）のとき、彼女のクラスのM子はその思いを語った。それはM子にとって大きな意味を持つ発言であった。その発言を彼女は、顔をくしゃくしゃにして聞いていた。その姿は強烈な感動となって胸の中にある。彼女は1994年度の「峠を越えて」に「よろこびを見つけた日」という思いを綴っている。以下その原稿である。

※ ※ ※

11月に開かれた全同研徳島大会の分散会で、以前に勤めたK中学校で一緒だった先生と再会した。K中学校を離れもう4年になるが、彼女の顔を見るだけで共に頑張った数々の思い出がよみがえってくる。

「先生、Iは元気になっていますよ。時々、仕事の帰りに会うんですよ。」

「Iももう20才になるでしょう。」

話が自然に、当時K中学校を卒業していった生徒の話になった。Iは転勤する私に、『先生、どんどん学校変わって同和教育していけよ。俺を差別した人が住んどる所へ変わって行って同和教育がんばれよ』という言葉を残してくれた。

「板野中学校の実践報告資料集の中にある先生の指導案を読ませていただきました。あの中に書いてあるのはIのことでしょう。すぐにわかりました。荒れとったIも今は落ち着いて家の仕事

でがんばっとるし、部落解放のためにがんばっているお母さんの思いを受けとめて、お母さんに続いているようですよ。」

「そうですか。先生、私ねえ、I が最後に私に話していった言葉が忘れられず、心の中にあるのに、あの子の言う同和教育をがんばるってことがわからなくて、がんばっとるふりしかできなくて……。」

短い休憩時間の立ち話の中、教師になってから今までの間、自分は部落差別とどうかかわってきたかをまた考えていた。

K 中学校での3年間は副担任、念願の担任に初めてなれた新任地ではいつもIの言葉を頭においていた。道徳の時間、校内での研究授業、同和教育研究会での公開授業、毎日の生活の中での同僚との会話、「同和教育をがんばれ」という言葉が頭にあった。しかし、がんばればがんばるほどがんばっているふりをしている自分に気づいていったし、気づけば気づくほど部落問題学習から逃れようとしていた。周りの先生に自分が何にもわかっていないことを見抜かれるのではないかと、格好だけの自分を非難されたらどうしよう、担任する生徒たちにも何の思いも語れない自分にも気づいていった。ただ「差別はいけない。一緒に助け合って差別をなくしていきましょう。差別を見抜ける人になりましょう。」と繰り返すしかなかった。

そんな私が「全体学習」のある板野中学校に来ることに不安を抱かなかったはずがない。全体学習も森口先生がしているものと思い込んでいたので、すべての担任が授業者となることを聞いて本当にびっくりした。それでも、がんばるふりしかできない自分を変えたかった私にとっては「やらなければならない」と気持ちがあった。

9月30日。初めての全体学習に臨む私に「終わればまたやりたいと思いますよ。」と繰り返した森口先生の言葉は現実にならなかった。「同和教育のよろこび」というけれど、それが何なのか、どんなものなのかその時の私にはわからなかった。

あれから半年が過ぎ、今ここに立って自分を見つめてみるとやっぱり部落は重く、部落を差別してしまう意識がある。しかし、1年間生徒と共に、仲間の先生方と共に繰り返してきた部落問題学習は私に歩むべき道を教えてくれた。私は、これまでの自分がまちがっていることがはっきりとわかった。部落差別がまちがいであると知りながら、何もしていないことがまちがっていることがわかった。何もしていない自分がまちがっているとき、本当の自分を見つめることができ自分を語っていけるようになった。まちがいを正しながら生きることの「よろこび」を手に入れることができた。

1年生の4回目の全体学習では丸岡忠雄さんの「ふるさと」を学習した。6時間目の授業の中で初めてM子が手を挙げた。「逃げられるものなら逃げたい、隠し通せるものなら隠し通したい」そんな家族の思いとの間で苦しむM子。「この世のなかにまだ部落差別がいっぱいあるなかで『私は部落の人間です』とは言えません。周りから差別されるような気がするんです。友達のなかにもほんまは部落のこと差別しよる子おるし、友達は差別せんでも家の人は私と『遊ばれん』って言うと思う。そしていろんな所に噂になって流れていったら、今住んでいる所の人みんなから差別されるかもしれん。私の場合は家がぜんぜん部落のないところにあるから、1軒だけ部落だとわかったら絶対差別されると思います。」そんな思いを綴った生活ノートが「ふるさと」を学習するうちに私のもとに届けられていた。そんなM子の自分を語る姿は今も目に焼き付いて離れない。

《私は入学してすぐの頃、部落、部落差別に対する怒りはあんまりなくて、『部落差別はいかん

なあ』っていうくらいだったけど、今は部落差別に対してすごく腹が立ちます。差別を受ける理由なんてどこにもない人が差別されて苦しむなんて絶対許せないし、自分が好きな人と結婚するのも反対される……。結婚して幸せになることもできないなら、絶対に部落から逃げようと思いかもしれません。でも、部落から逃げて自分は差別を受けなくても、心のなかに部落という重いものが残って、ずっと生きていくなかで部落差別が……。部落差別をされる、部落差別をされなくて、『自分は部落や』って言うことを言わないで逃げていくばかりでは、部落差別はなくならないし、今、発表……。私はうまく発表できないけど、私の言った一言が自分に負けないための発表だし、部落差別をなくす第1歩なら、どんなことでも発表していきたいです。》

学会会話をすればうつつむいてただ泣くばかりのM子を思い出して自分の思いとM子の思いが重なり、涙があふれて止まらなかった。拭いても拭いてもこぼれ落ちる涙は「よろこび」の涙だった。自分自身のなかにある差別意識、そのことを語りながら変わっていきける「よろこび」、まがいな自分を正しながら生きることの「よろこび」を見つけた。

2月4日。2日前に本年度最後の全体学習を終えて、1年C組では「人の値うち」について思いをつないでいく話し合いをしていた。その中でひとりの生徒が語ったことは入学して間もない頃に学習した「峠」についてであった。

《峠は違うと思うんよ。峠までの距離、峠までの道の様子、つまり峠の大きさは人によって違いがあるんよ。自分が峠を越えたからといってあとから来るものを駄目な奴とっていいか。自分には峠が見えたからといって途中で止まっている人を見捨てていいんか。自分が峠を目指しているからといって、途中で力つきている人を駄目な人間としか判断しないのか。人はみんな峠を越える可能性をもっとるんよ。だからこそ人間は生きていかなあかんし、支え合っていかなあかん。みんながもっとる可能性を發揮していく生き方していけたらいいし、他の人の可能性やっつて認めていけたらいいと思う。》

1年C組、32人の仲間とともに取り組んできた営みが、生徒たちの生きる力となり、2月4日、あの日の部落問題学習で見た仲間の輝く姿を通して、思いを語るなかから変わっていく自分の姿を通してみつけた「よろこび」を語り伝え、自分が自分に負けないために、自分自身のためにがんばり続けてくれることを願って止まない。それが私自身への願いでもあるように。

※ ※ ※

昨年度から引き続いて共に全体学習に取り組んでいる豊田先生と山口先生にも多くのことを学ばせてもらった。人間は差別という檻から解放されるたびに人間として強くなっていく。そのことを実感していく実践の中であるが、二人の先生が本年度のまとめとして綴った文章も私の心を洗ってくれる。豊田先生は、1年A組の担任として第4回目の全体学習で「ふるさと」の詩に取り組んだ思いや、自分と部落とのかかわり、板野とのかかわりを赤裸々に綴る。この生きざまをすべての教師のものにしたいと思う。彼女の思いである。

※ ※ ※

思い返してみれば、私の心の中に板野に対する差別意識が生まれたのは中学3年生のときだった。今から20年前、私は学校代表の健康優良児として、この板野中学校に初めてきた。その頃、板野町に被差別部落があるということはまったく知らなかったが、板野中学校には怖い生徒がいるという噂だけは、どこからともなく耳に入っていた。そのため板野中学校へ行くと決まったとき、なんだか嫌な気持ちになったことを覚えている。今の理科室が郡内の生徒の控え室となっており、私は話す知り合いもなく緊張で硬くなっていた。そのとき廊下を4、5人の男子が長らん

姿に革靴、髪はリーゼント風（はっきりとは覚えていないが）で歩いて来た。制服の上着のボタンをはずしているため、腹巻き姿の生徒もいた。中学校にこんな人たちがいるのかと、驚きと怖さで早く帰りたいと思った。本当に板野中学校って怖いところだとそのとき再認識した。私の出身中学校は、郡内でも一番田舎であり和気あいあいの学校であったため、このことは大きな衝撃として深く脳裏に刻みこまれた。

私の中学時代は郡内に7つの中学校があり、3年生ともなると実力テストの結果をよく先生から聞かされた。「うちの学校は郡内で下から2番目。だからしっかり勉強しなさい。」とか、「〇〇中学校は成績がよい。板野郡の総選校じゃ。〇〇中学校が一番下じゃ。」というようなことが耳に入りだした。私たちはこういうことを抵抗なく聞き入れていた。今思うと身近にある差別に気づかず、差別にどっぷりつきながら中学時代を過ごしてきた。多感な中学時代に鮮明に刻み込まれた「板野は怖い」ということが、大人になっても根強く残り、前任校から板野中学校への転勤は大きなショックであった。

私は中学の頃から教師になりたいという夢を強く持っていた。担任の先生はもとより、他の先生からも私はかわいがられ、俗にいう先生から気に入られるいい生徒であった。優しい先生にも巡り合い、学校の先生っていい職業だなあと思っていた。しかし、念願かなって教壇に立ったとき、私の頭の中には部落問題学習のことなどまったくなかった。

板野中学校で4年間全体学習に取り組んだが、2年前に私はこの学習の大切さ必要性を痛感した。私の目を覚ましてくれたのはまさしく生徒であった。生徒の部落差別に対する怒りの声が、私の心を動かした。今年度も感動ある出会いが何度もあった。私と年齢の変わらない母親が、娘を部落差別に真正面から向き合い、差別に負けない、部落に生まれたことを恥じない強い人間にしてほしいと懇願された。

また、ある母親は、体育館で行われる全体学習をたびたび参観に来られ、そのときの感想や思いをそのたびごとに手紙にしてこられた。その母親から届いた手紙の一部に、『これからもあの大きな体育館で大いに話し合い、友として先生と涙を流し、ありったけの思いをぶつけ合って燃えあがってほしいです。昨年の「峠を越えて」を私なりに勉強して大いに燃えたように。また、今年も来年もずっとずっと話し合いわかり合ってほしいと思います。』というものがあつた。

教師になっていなかったら、まったくこの問題に無関心で生きているであろう自分と比べてみると、この母親のすごさに胸が打たれる。

板野中学校の体育館にさまざまな思い出が刻まれている。涙を流しながら自分のことを語る生徒。それを聞きながら知らず知らずのうちに私は涙を流していた。部落差別への憤りと怒りを熱く訴える生徒。震える手でマイクを持つ生徒の姿を何度見ただろうか。冷たく硬い私の心が段々とかされていくのを感じた体育館である。

私はこの2年間で教師としての喜びと誇りを感じる事ができた。部落問題学習をどうでもいいと思っていた頃の私は、平均点が何点だの、〇〇高校へ何人合格させたらということが、教師としての使命であり誇りであると勘違いしていた。しかし、今は違う。人間としてどう生きていくか。恥ずかしくない生き方とはどういうことか。自分を誇って生きるとはどういうことかと生徒に問いかけ投げかけると同時に、私自身にも問いかけるようになった。常に生徒と真正面から向かい合い、本音を語り心の中に持っている差別意識を洗い出すことが、教師としての使命であると自覚するようになった。そのためにひたすら自分自身の中にある差別意識を見つめることが大切であると思う。

以前からどうしても「ふるさと」の授業をしたいと思っていた。1年生ではちょっとむずかしい資料ではないかと最初躊躇したが、思い切って取り組むことに決めた。「ふるさと」と言えば、室生犀星の詩を思い出す。私にとってのふるさとは、父母であり、妹であり、友である。私の実家は土成町でも山にあり、夏になるとあちこちの田圃から蛙の大合唱が聞こえ、夜になると犬の遠吠えしか聞こえないという本当に静かな土地である。私は実家に帰るとホッとする。張りつめた心が緩んでくる。胸いっぱい野山の空気を吸い込むと生き生きしてくる。そんなふるさとを私は誇りに思う。しかし、板野町に嫁ぎながらも、いまだにこの板野町を好きになれない自分がある。部落問題学習を教えながらも、この気持ちを払拭できない自分の心の醜さに腹が立つ。本音と建て前を上手に使い分ける知恵がついている自分に腹が立つ。

生徒の中にも自分の住んでいる板野町を好きでないと切り切る生徒の多さに驚いた。陸上の大会に出場したとき、「板野中学校、〇〇さん」と放送されるのが恥ずかしいし、嫌な気持ちになると発言した生徒がいた。板野中学校の陸上部と言えば県下でも上位であり、堂々と胸を張れるはずなのに、板野中学校の陸上部を誇れない。板野に生まれた板野に住んでいる自分を誇れない。そんな生徒を目の当たりにして、自分と同じだと思い、この「ふるさと」を公開授業に選んだ。

全体学習を終えて、生徒たちは自分の思いと喜び、全体学習の充実感を切々と綴ってきた。あの広い体育館で自分の差別意識を語り、親の差別意識を告白することが、どれほど勇気がいることかを身をもって私も体験した。板野町に生まれ、板野中学校で学んでいることが誇れるそんな生き方をこの子たちにしてもらいたい。

もうすぐ暖かい春がやってくる。吉野川の堤防は黄色の菜の花のじゅうたんで敷き詰められる。私はこの菜の花が大好きだ。折れた茎から、また芽を出し花を咲かせる菜の花。一本ではそんなに美しくないが、群がって咲いている菜の花の美しさはたとえようがないほどである。1年A組32名が一本一本の菜の花になり、強く美しく生きてほしい。

13歳で人間の生き方をこんなにも真剣に話し合い、考えられる板野中学校は、やはり素晴らしいと思う。そして、私も助け合い部落問題について語り合える素晴らしい同僚に出会えたことに感謝したい。

※

※

※

1年D組の担任である山口先生の「峠を越えて」に綴られた原稿も、私の歩むべき道を明確に示してくれた。この全体学習の取り組みが本物になり、教師も生徒もその両方がキラキラ輝く取り組みにしていくためにいっそうの精進を続けたい。山口先生が「輝く姿、熱い思いにふれて」とまとめられた原稿である。

(1) はじめに

板野中学校に赴任して3年目を終えようとしている。1年目の学習会での自分の姿をときおり思い出す。クリスマス会だったろうか、校長、教頭を始め同担、学専の先生、各学年より数名ずつの担任、副担任など、教師は約20名ほど出席していたように思う。1年生から3年生までの生徒たちが、学習会によせる思い、部落問題に対する思いを話し合う中で、生徒たちと同じように自分から手を挙げて発言する教師たち。次から次へ教師が語る中で、私は何を思っていたか。「私は副担だし、ま、いいよな。今日は割当て来たんだもの……。えっ、あの先生も発言したのか。おっ、あの先生も言ってるなあ。ふうん……。ほとんどの先生がしゃべってるなあ。でもまだあの先生は言ってないし……。私なんか言わなくてもいいだろ。あれっ、えっ、もう残っている先生はあの人と私だけー。そんなあ……。何か言わなくては、私、立場上まずいんじゃない

だろうか……。どうしよう……」

そんな焦りばかり。生徒たちの言葉や教師たちの言葉に耳を傾けることさえせず、ましてやみんなの熱い思いは全然私のひからびた心には響かなかった。ただ自分の立場を取り繕うことに頭を巡らせていた。そのうち、なぜかだんだん腹がたってきた。自分を情けないなどと思もしなかった。それどころか、「なぜこんなことで私が追い込まれなければならないんだ。言うか言わないか、人の勝手じゃないか。周りが何を語ったって私は別に何も言うことがないんだから言うもんか。“はだかの王様”にはならないぞ」と思っていた。

何も言わない私に対して、誰も非難の日や突き詰めるような言葉を向けなかったにもかかわらず、一人でいららし、自分からかたくなに心を閉ざしてしまった私があった。部落問題学習に心を開けず、自分の殻を破れなかった。それどころか斜めに構えて批判的に板野中学校の全体学習を見ていた私があった。こんな私には決して進歩や発展はなく、一層うじうじとし、強がり、からいばり。情けない自分に気づくことなど到底できるわけなかった。

私のこういったかたくなな心を溶かしてくれたのは、森口先生の「よろこび」という本であり、学習会で、クラスで、全体学習で苦しい胸のうちを涙をこらえ一生懸命語る生徒たちの姿、熱い思いであった。そして、毎日、毎休み時間、部落問題に対する姿勢を、人間としての生き方を話してくれる同僚の言葉であった。そして何よりも口先だけでない体当たりで生徒に接する姿、決して弱音をはかず、生徒たちのがんばりをいつも自分のがんばりの“かて”とされていた姿であった。ほんとうに私の心、体に響くものであった。

今、手探りの毎日ではあるが、がむしゃらにでも歩き続けられているのは、生徒たち、同僚たちの胸を打つ姿、言葉に、毎日のように接してられるからである。そういう中で私の意識の中にある醜い部分から目を反らさず、ごまかさずそれに立ち向かおうとする姿勢を保ち続けられていると思う。

今年度も私がそこから活力をもらった姿、言葉がたくさんあった。この部落問題に取り組まなければ出会えなかっただろう輝く姿、熱い思いである。

(2) 郡同研での同僚の姿

「板野中学校の先生すべてが部落問題学習にがんばっているわけではないです。部落問題学習に、全体学習に、邁進し打ち込めていて、すばらしいと評価されている板野中学校のその中で、私はできていません。苦しいです……。信念を持って部落問題を自分の問題として取り組んでおられる先生がいる中で、私は自分のことになりえず、どうしても授業の形になってしまう。どうしても自分の問題として捉えられないんです……」と涙で声を詰まらせながら大勢の他校の教師たちの前で打ち明けた姿である。この研究会での話し合いが、昨年度私が全体学習で取り組んだ資料について展開されていたので、関連して意見を言った私のすぐ後で、隣に座っていた先生が発言したのであった。担任として生徒たちとの話し合いの糸口、手だてがつかめず苦悶する同僚の姿であった。

黙っていてもこの研究会は進行するし、板野中学校の取り組みは周知の会である。しかしあえて自分のできていないこと、苦しいことをはっきりとみんなに打ち明け、もがいている自分を暴露する。

なぜこんなことをこの先生がこの場で発言したか。部落問題にきちんと前を向いて取り組もうとされている証拠だと思う。部落問題に対する自分の姿勢を直視し逃げないで自分の生き方をさぐるうとされたからだろうと思う。本音を語ることからこの学習はスタートしていくということ

を身を持って示された。

自分を安全なところにおいて部落問題を論じるのではない。“ふり”はしたくないのである。だからこの先生のような思いを打ち明けられても「えーっ？できてないって」などと誰もかげ口を言ったりしない。それどころか、がんばれ、ここをがんばれ。ここからだよ。私たちといっしょにがんばろうって思う。仲間が増えたって思う。私も通ってきた道だし、また出会うかもしれない壁だからである。

(3) 先輩教師の言葉

「部落の人の気持ちはほんとうには私にはわからんと思う」長くこの板野中学校で部落問題学習を率先してやってこられた先生の口からこの言葉を聞かされたとき、ほんとうにこの人は部落問題のこと真剣に考えているんだろうかと顔を見直してしまったくらい驚いた。「どうやったってほんとうの気持ちはわからんと思う。私はある手術をした。このときの痛みとかその時の思いとかこの病気にかかってこの手術をした人間でないと分かってもらえんと思う。いくら言葉でこうだった、ああだったと言ったところでほんとうの痛みと言うのはわからんよ。そんなふう to 実際のところ私はやっぱり部落の人の思いはわからないのところがうだろうか」

日々の生活の中で部落問題に関する自分の姿勢を話すことが多くなったこの頃であるが、人一倍熱心に取り組んでいるこの先生からこういう言葉を聞くとは思わなかった。この先生の態度に疑問や不満を感じた。投げやりになっているとしか取れなかったが、慥然としたまま「そうでしょうか……」といったきり、返す言葉がなく黙ってしまった自分があった。部落の人の気持ちを分かろう分かろうとしてきた私であったから、この言葉にうろたえてしまった。何度も何度もそうなんだろうか、分かりきれないんだろうか、繰り返し自分の胸に問いかける。でも結局はそうかも知れない、こう認めざるを得ない。それがやっぱり悔しい。

語るたびにまだ涙が出そうになる私の父への思いも、これを聞く人は「何でそんなことで悩むんかなあ」とか、せいぜい、「そうか、そんなにづらいことだったんか」という程度で、私の苦しみはほんとうには分かりきってもらえてないのだろうか。では私はその気持ちを分かってもらいたいために話してただろうか。そうじゃない、ふれたくないことから目をそむけずぶつかっていくことで、誰にもしゃべれなかった苦しいことを吐き出すことで、自分自身を強くしたかったから話したんだ。

一人ひとり、その人にとって重いもの、苦しいこと、触れたくないほど憎むべきことは違はず。それを、「あなたのは私より悩みが軽い」とか「私の方がより深刻だ」とか比べることはできないと思う。それらから自分を解放していけるように、その醜い部分を押し隠していくのではなく吐き出していくとき、その苦しさは同じなのではないだろうか。今の私には自分にとって苦しいこと、隠しておきたいこと、こういう所で、部落問題を考えていくしかないのだという結論になる。

しかしまだ、「部落問題は家が貧乏だったとか、お父さんの仕事で惨めな思いをしたとかいうこととは全然次元の違う問題やけんあ」などと言われたりすると、やっぱりまた悩んでしまう。「中途半端ならやってくれんほうがいい、子どもたちを不安がらせたり、暗い思いだけを植え付けるだけやから」という言葉を思い出したりする。いつも自分のやっていることはこれでまちがっていないんだろうか、こんなやり方でいいのか、という不安はやはりつきまとう。他の先生がやっていることが気になってしかたがなくなることもある。こんな時あの先生だったらもっと適切な言葉でもっと生徒たちの心に刻みつけるような語りができるんだろうに、あの語れない生徒

もあの先生ならもっと力強く歩んでいける子にできるんじゃないだろうか、などとくよくよ思うことも多い。こういう自分を奮い立たせるときにやせ我慢かもしれないが、うつむいたり嘆いたりしても始まらない。とにかく今の自分にできるやり方で自分をぶつけていくしかないと思いきな。この段階を自分の足で踏みしめていかなければ次の段階には進めないと思うことにした。

「何を今ごろそんな稚拙なことを言っているのだ」と学習を積んできた人には言われるかもしれない。「そうじゃないだろ、まだそんなレベルか、あまいよ」と言われるかもしれない。しかし誰だってそういう段階を通過して今現在の姿があるのだらうと思う。今の自分をさらけ出すことは何も恥ずかしいことではない。泣いてしまう自分が今あってもそういう弱さに打ち勝とうと正面からぶつかっている姿は決して恥ずかしいことでなく、むしろ誇らしい姿だと思ふ。批判を恐れて分かったようなふりをしてもっともらしいことを言って、本音とたてまえを使い分ける姿こそ恥ずかしい。こうやって自分の思いが活字になることに全然抵抗がないわけではないが、批判や指摘をしてもらうことによっていたらない部分の向上をはかりたい。

(4) 鏡

ある学習会での話し合い。自分の思いを切々と語る先生の言葉に、何の反応も示さないどころか、隣の子とにやっと顔を見合わず様子に、思わず「何も感じないのか」ときびしい口調になってしまった。自分の父に対する思いをぐっと涙をこらえながら絞り出すように話すその先生の姿が、ついこの間の私自身と重なり、その思いが痛いぐらいに分かっただけに黙っていられなかった。「他人の痛みの分かる人になってほしい。つらい思いを打ち明けるときの苦しさが分かるんだったらつながろう、その思いに応えていこう。他人が自分の道を切り開いて行ってくれるんでない、自分を変えていくのは自分でしかない」などともったいをつけて言ってみたところで、顔は怒りでとんがっていた。心の中では「なぜ響かないんだ。なぜ受けとめられないんだ」と非難する気持ちでいっぱいであった。案の定、生徒たちはますます黙ってしまい、気まずい空気になってしまった。

あとで静かに話されたある先生の言葉。「確かにしんどいことを勇気を出してやっと伝えたときには、誰かに何かを返してほしいと思う。しんどいことを分かち合ってほしいと思っても相手に伝わらんことがある。『ほんなことでも悩んどんか』と一言で言われることさえある。でもそれは『私たちにもっと強くなれ』って言っていることなんだ。返してくれん人を責めてもしかたがない。見えるものは全て鏡。しゃべれないのも自分の姿。手を挙げられないのも、戸惑っているのも自分の姿なんだ」

またもや自分の弱さ、力のなさを痛感させられた。すぐ他人を批判する、愚痴を言う。責める前に、あの子たちがなぜそういう態度をとったのかを、押し量ることもなく表面に表れたことだけを見て単純に判断してしまう。「すべて私の鏡」を忘れないようにしたい。

(5) 1Dの生徒たちの輝き

入学式での初めての出会いの日、「もう自分が自分自身を育てていく責任者だよ」と話した私の言葉を胸に刻み込んでほんとうによくがんばったと思う。この1年、生徒たちは私の予想以上にそれぞれの段階での自分にできることをしっかりやってきた。毎日毎日、そんな生徒たちからどれだけ私は力をもらっただろう。

「えっ？、僕って行かなあかんの？」初めて学習会の通知を手渡したとき、困惑したように受け取ったY男。「あれっ？小学校の時、行っていないのだろうか」私も驚いて急いで調べてみる。やはり学習会での文集に思いを載せているし、学習会にも参加していたようだ。中学校の学

習会の開講式にも出ず、しばらくは参加していなかった。開講式に来ないY男の家に電話をした時、母親が「暗く沈ませたくない。今この時期は伸び伸びと学校生活を過ごさせてやりたい。本人が行きたくないって言うんだったら無理には行かせようとは思いません」と言われた。それからの学習会にも出席せず、クラスでの話し合いにも発言はなかった。そんなY男が今では学習会はもちろん、クラス、学年の話し合いを引っ張っていく力強い存在になっている。そしてこのY男の思いをうけて次から次へと熱い思いで立ち上がる生徒が増えていった。このY男が初めてクラスで自分のことを語ったのも、やはり仲間の思いを受けてであった。ふだんはとても口数の少ない女の子が、自分が学習会に参加できていなかったわけを途切れ途切れ泣きそうになるのを必死でこらえながら語ったあとだった。ずっと手を挙げたその時のY男の姿は今でも鮮明に覚えている。その日以来ずっとたくましく歩き続けている。「自分に負けたくないから思いを言っていく。仲間につなげていく」と背筋を伸ばして堂々と語る。「父の仕事を大切に思う気持ちを僕に語ってくれる母を誇らしく思う」と語る。実にさわやかである。すがすがしく、クラスでもグループによる話し合いでも仲間を大切に、そして勇気づけていく姿が見られる。

<初めての全体学習がありました。最初の公開授業でB組ががんばっていて、次の全体授業の時間が来ました。今度は僕たちの番で僕が発表できたのは終わりの頃でした。僕は「学習会や道徳やひかりの学習は大嫌いだ」と発表した。どうしてかという、やっぱり胸が苦しくなってくるからで、ほんとうはもっと深いわけがあると分かるけど、それを心では思っている、言い表したり書き表したりするのができません。でもやっぱり一番差別をなくしていくのは行動力と発言力がいると思います。僕はこの2つを身に付けていきたい。> (5月)

<1時間目に話し合いがあって、みんなが手を挙げて僕たちを支えてくれていたのに僕は手が挙げられませんでした。それは自分に自信がなくてまちがっていることを言ったら、みんなに何か思われるかもしれないかと思って、友達を信頼できなくて、とてもそんな自分がいやでした。でも明日の全体学習で、一つでも自分が好きになりたい。僕はまだ不安なことがあります。それは、僕1人が何か言っても162人の人が考えを変えてくれたり、「そう」と思ってくれたりするのかとても不安です。これも友達を信頼できていないのかもしれないけど、森口先生が「人間は踏ん張らないかんときには踏ん張らなあかん。前の全体学習、最後発表してすかつとしただろ。明日もきれいにならべて言わんでもいいから、心にあるもんしほりだして全部はきだせよ。何か言うたら一人でも変わるやつがおるけんがんばれよ」と言ってくれました。だからできるだけ発表したい。そして自分をちょっとでもいいから変えたい。> (6月)

<今日の全体学習で僕は初めて3回発表した。今日はなぜかやる気が出てきて5時間目からほんとう意見を言いたいくらいだった。6時間目になってよっしゃあ言えると思った。それで、それができた。僕は自分に負けなくなかった。僕は人に負けることよりも自分に負ける方がすごい悔しい。それに僕は自分に負けたら終わりと思っているから、発表した。僕は本当の友達とは全体学習や学級の話合いで、自分が言うたら続けてくれる、続けれるというのが、ほんとうの友達と思う。それと自分の思っていることを言えるのがそう思う。だから先生、1Dも仲間が言ったらそれに続けていける支える学級にしていこうや。みんながんばろう。> (9月)

ひたむきに、自分に負けまいと一生懸命ががんばっているY男の姿は、多くの仲間のがんばりのもととなっている。しかし力強く歩いているからY男はもう大丈夫というわけではない。第2、第3の峠がこのY男にもやってくるにちがいない。でもその時Y男と一緒に歩く仲間がいる限りへこたれはしないと信じている。Y男がつけた熱い火を私も心にともし続けていきたい。

Y男と同じ学習会場に来ているA男とK男は、まだY男のように立ち向かえきれないでいる。「勉強をしっかりとにかくがんばれ。いい大学行っていい会社に入って見返してやり、立派な人になったら誰にも何にも言われへん」と母親に言われているA男は、常に勉強を母親に強いられているという意識があり、“テスト”とか“勉強せなあかん”とかいう言葉に過敏でこういう話になるととたんに顔つきが曇る。母親の、部落に生まれたことをひけめと感じ、成績を上げることで自信を持たせ強くさせようとするこゝろにいらついている。

ある日突然、この母親から憤った声で「これは先生だけじゃなく、板野中学校の先生全部に言いたいことなんです、部落問題学習やるんだつたらもっと明るい展望を子どもが持てるような部落問題学習をやってください」という電話がかかってきた。どんどん意見を言って顔つきにも自信がみなぎっているY男とは対称的に、顔はうつむいてこそないが、部落問題学習になるととたんに重く暗い雰囲気になるA男の心を解放し得ない限り、母親にとって板野中学校の取り組みは本物じゃない。母親にいくら私たちが思いを伝えても母親に分かってもらうことはできない。こういった両親の、家族の意識を変えていけるのは、子どもたちの変容しかない。学習会の保護者会でたった一人で参加してくださり、私たち教師に本音で話してくれたK男の母親はいつも「しゃんとしろ、弱音を吐くな」とK男に言う。生来自分の気持ちを表に出すことが苦手のK男は仲間の意見を聞くだけで、促されるとぼつぼつしゃべるが、ほんとうの胸の内は語りきれていない。苦手なものの都合の悪いことに会おうと回避したがるK男の意識を変えていけない限り母親の期待に添える取り組みにならない。

A男やK男のように心が重くなったまま、自分の思いを吐き出せずにいる子にどうやったら話し合いの時間、充実したものにしてできるかを考え、グループでの話し合いを取り入れてみた。今までの話し合いから、この子なら僕の気持ちを分かってもらえる、この子なら話せそうだ、この子の話を聞いていると力がわく、この子の意見をもっと聞いてみたい、そんなふうに見える人とグループにならせた。3人、5人と人数はばらばらだが、意外とスムーズにグループを作り、話し合いをいつもリードしている子を中心に熱心に語り合う姿が見られた。

「班になったら今まで聞けなかった人たちの意見が聞けていいです。軽いムードが作れるし」という意見が多かった。「今まで全体で話ができなかった子も意見が言えて、また、聞きたかった子の意見が聞けてよかった、これからも班での話し合いをもっとしていきたい」という感想が多かった。事実、班での話し合いを止めて私がクラス全体に話をしようとする、「もう少し時間をください」とはつきりと要求される。熱心に膝をくつつけるようにして思いを伝えあっている。<班学習をした。すごく自分の気持ち、意見が楽に言えた。いい班員にめぐり会えた。先生に

「班になってみよう」と言われたとき、KY君やSY君もそろそろ来た。けど僕は正直言って一番なりたい人がいた。だからその人の所へ一番に行って、「一緒の班になろう」とYM君に言った。どうしてYM君が一番に言ったかというそれは僕の信賴している人だからだ。話し合っているときちょっと泣いてしまったけど、TS君やYN君、KS君もうなづいてくれていた。その後YM君が「ありがとう」と言ってくれた。すごく、すごくうれしくて、体が軽くなった。僕はほんとうにこの班になってよかったと思う。だから自分の意見を班の中だけにとどめておくのではなく全体にも拡大していきたい。>～T男の生活ノート～

いつも話し合いになると表情が硬くなり、言えない自分といつも葛藤していたT男。班の中でやっと自分を語れ、それにすぐ返してくれる仲間によって自信をつけていった。班での話し合いをクラス全体に伝えられるようにまてなった。T男のように班の仲間からの力を得て、クラス全

体での話し合いに語れるようになった生徒が数名出てきた。次回の学年の全体学習での発言を目標にさえするようになっていく。

A男は今まで母親の言うなりで何か暗い感じを引きずっていた親があった。ある学習会の話し合いで、「みんなはお家の人に『しっかり勉強しろ。いい大学入って、いい会社にはいったら差別されなくなるんだ、誰からも何にも言われへん』て言われたことない？」とたずねてみた。

「学歴をつけたら、いい会社に入ったら差別されなくなるのか」という話し合いになった。差別されんようにしていただいいのか、差別をがまんするのか、部落に生まれたんやからしかたがないというのか、そうじゃない。決して差別されなくなっただいいということではないんだ。差別自体がおかしいんだ。差別されなくなるようにするために学習会に来ているんじゃない。差別を壊すためなんだ。この話し合いはきっとA男の心に刻まれたと思う。

つい昨日のA男の生活ノートである。

<先生に聞いてほしいことがある。僕の親は勉強一本なんです。時々親がな、「〇〇君を抜きよ。」とか言うんです。そんなこと言うお母さんに言い返せれんかったんがつかなくてつかなくておれん。もう涙が出そう。それと、「A男には〇〇高校に行かす」とか言って、人のことほっといてくれと思う。自分で自分の人生歩みたい>

「なぜお母さんがそういう考えになってしまったかを考えたら、お母さんに腹は立たなくなると思う。お母さんをこんなふうな考えにしてしまったものに怒りは向けるべきだったよね。A男がお母さんに対して、怒ったりすねたりせず、言い返してやりたいとか、腹立たしく思うんでなく、お母さんの心を軽くする、こんな考えから解き放してあげる生き方をしていこうよ。お母さんと一緒に差別を壊していく生き方を考えようよ。A男のように言われている子、A男のようにお母さんに対して思っている子、クラスにも多いはず。ぜひクラスみんなに投げかけて、一緒に考えていこう」こう私は返事を書いた。

声を発しないN子。

私が担任をしている今年のうち、話し出せたらいいのになあとつい思ってしまう。特になごやかな笑顔が増えて学校生活を楽しんでいるこのごろの様子を見るにつけ、もう少して声が聞けるんじゃないかと期待をもってしまう。でもそれはやはり自己を満足させようとする私のおごりである。そう願ったとたんせつかく開きかけたN子の心がまた閉じてしまうような気がする。しゃべってくれるといいなあという私の気持ちが押しつけになったとたん、N子と育んできたほどのとした関係が壊れそうに思う。焦らずゆったり接していこうとそれだけを守っている。幸い何もしゃべらないN子だが常に温かい友に囲まれて笑顔で過ごしている。毎日誰よりも早く一番に提出されている生活ノートには思いがせつせつと書かれている。声でこそ話さないが、N子とは毎日話している感覚がある。クラスの友達に対しても学級新聞「蒼空」の中で自分の思いを伝えようとしている。

<9月22日木曜日の5:30~7:30まで総合センターで「自分以下を求める心」について話し合いました。「自分以下を求める心」を読んでいると、自分のことが書かれているように思う。どうしてだろう。私も下の人してほしいと思っているけれど、よく考えてみると私より下の人なんかいないと思う。『私は今まで、人間として恥ずかしい生き方をしてきたのです。何べんも何べんもまちがったことをしました』はほんとによく分かる。

先生は自分の思いを全部言ったら、少しは軽くなると言っているけど、たぶんたくさん心の中につままっている思いを言うとしても、絶対1つはかくすというか、心の中に残してしま

う。たとえば私で言うと、その1つというのは、すごく重いことを特に残してしまうと思う。こういう話はいやだから、学習会に行きたくないと思っていても、友達に誘われれば、行かないわけにはいかないと思ってしまう。でもあとで思うと行ってよかったという気持ちになる。>

このN子の「蒼空」を元にクラスで話し合う。この学級新聞「蒼空」は輪番制で学級全員が担当している。個性あふれる新聞を作り上げても、その中に自分の思いをなかなか書ききれない生徒が多い中で、日頃の思いを書きつづったN子の「蒼空」に触発され、1時間では語り足りないほど意見が次から次にあふれ出てきた。その翌日のみんなの生活ノートにも語りきれなかった思いが記されていた。ふだん何もしゃべらないN子の胸のうちを知ることができ、語らない仲間も現実にごやっして心の中では思い悩み揺れていることを知り、共に考えていこうとする姿が見られた。N子の顔は、声こそ発しないが明るくにこやかに生活にも伸びやかさが見られるようになっている。

いつまでもこのゆるやかな関係を続け、N子がしゃべられる日を黙って待つだけではいけないとは思いますが、心を満たすこと、豊かにうるおわすことだけを今のN子には望みたいと思っている。うつむくI男。

耳の間聞こえないことがどうしても自分にとって触れたくないことでしかなく、その壁を乗り越えられないでいるI男。「苦しいことを吐き出していこう。辛いことは辛いて言っていこう。こんなことで悩んでいるんだって打ち明けてみよう、きっと変わる自分がある」こう話し合いの時間に訴えても、このI男にはできずずっと黙ったままだった。I男のことをより深く理解しようと、母親から難聴児に関する本を数冊借りて読ませてもらったり、3歳の頃の母親との学習状況を録音したテープを聞かせてもらったり、難聴児に関する講演会や研修に出させてもらったりした。母親のI男に対する深い思いを聞かせてもらっているだけに、またよく気がついたり、友達思いであったり、係りの仕事などにひじょうにまじめに取り組み、がんばり屋のI男だけに、この壁はぜひ越えて欲しいと願った。しかし、一対一で話してみても、涙がたまるばかりである。「誰があなたのことを一番思っているん?」「お母さん」「違うよ、あなた自身よ。自分で自分のことかわいそうって思っているやろ。みんなにもかわいそがってもらいたいん?」とひじょうに厳しい言葉まで浴びせてしまった。この部落問題学習の取り組みは全て自分に関係しているんだよと言っても、話し合いでは居眠りをしてしまうことさえあった。そんなある日の話し合いで、ある女の子が、「ちょっとI君、聞いてよ。私な、I君のこと大嫌い。耳聞こえんこと理由にな、ノートとらんかったり、自分が嫌なことは聞こうとしてない。そんなI君大嫌いじゃ。I君はな、自分で自分のこと差別しとるやんか。自分で人より下って思うとるやんか。みんなはな、I君にハンディなんかつけとらんよ。一生懸命がなばとる時のI君はかっこいいと思う。でも今のI君は嫌い」強烈な言葉だった。クラスの誰もがぎょっとした。この女の子の言葉に、そして自分たちの今までの態度にである。

じっと黙ったまま見つめ返すI男。やっとなら全体でI男のことを話す日が来た。見捨てない、遠巻きにして見ない、仕方がないと見て見ぬ振りをするんじゃなく、同じ仲間として一緒にがんばろう、同情や哀れみから真の仲間は生まれえない。ほんとうの仲間になりたいからほんねをぶつけたんだ。I男の聞こえ方の状況、小さい頃から人の何倍も努力をしてここまでになっていること、母親の、家族の願いを一心に受けてがんばろうとしていること、みんなには当たり前のようになっていることでもI男には非常な努力の上にあることを伝えた。

I男はまだ自分から語ることはできていないが、確かに周りの生徒たちのI男に接する態度に変化が見られた。I男に遠慮をしなくなった。はっきり「Iちゃん、それはあかん」ということが言えている。行動を共にする生徒が増えた。しかしI男のほんとうの立ち上がりはまだこれからである。

生徒たちの歩みにはそれぞれ個人差があるが、着実に確かなものになっているのを感じる。「道徳の時間が好きになった」「一番好きな時間は道徳の時間」「生活ノート書くのがすごく楽しい」こんな言葉がどれだけ私の活力になっていることか。N子やI男など配慮すべき生徒に対しての私は、正直言って強い信念を持って十分に組み組めたとは言えない。1Dの生徒たちとの歩みの中でどうにかやってこれたと思う。この子たちと歩いていこう。がんばっていこう。これからの歩みがひじょうに楽しみである。

(6) 全同研分散会でのあるお母さんの発言

「質問してもそれに沿ったお答を一向にいただけないというのも何となく質問するのが実に虚しい。だけど言わずにおれない、そんな私たち親の思いを分かっていたらいいと思う。根底にあるどろどろしたものをもっと出して欲しい。完成されたような、あるいはちゃんとしてきたことしか報告せんような報告は殆ど必要ない。こういうことをしようと思ったけどできなかった、あるいはやろうとしているんだけど、もっと他にどうする方法があるんだろうか、教えて欲しいって言う意味を込めた報告をして、こういう方法もある、こういう方法もある、と出し合ってそれを持ち帰って実践する。そこにこの大会の意義があるんじゃないか。みなさんは学校の先生なんだから、子どもを預けている親の思いに応えてもらえるような報告と態度を求めたい」

社会認識の分散会での討議で、私はおもいきり頭を殴られたような衝撃を受けた。あるお母さんのこの言葉を聞き、自分の傲慢さにあきれ果て、情けなくうなだれてしまった。情けなさはずっと涙が止まらなかった。

午前中の討議で、板野中学校の取り組みについての質問に、私はこんなふうになりました、こんなすばらしい子が育っています、こんな熱い雰囲気板野中学校は邁進しています、と自分が板野中学校で取り組んできたことをまるでひけらかすように発表して、この問題に取り組むことは人間の温かさを感じられるすばらしいものであると思うなどとまで結んで発言していた私であった。全同研という大会場で、ふるえながらも、つたないしゃべりながらも、発言できたことに満足さえ抱いていた私であった。

午後の討議の冒頭でのこのお母さんの言葉が、私の頭の中を何度も何度もリピートし、その後の討議はほとんど耳に入ってこなかった。毎日苦しんだり落ち込んだり、ぼろぼろになって取り組んだことも少なくないが、十分にできていなかったことの方が多い。生徒にしてもみんながみんな差別に向かって力強く立ち向かえたわけではない。学習会に参加できていない生徒もいたし、話し合いになるとうつむいたり、かたくなに口を閉ざしていた生徒もいた。自分のこととして捉えられない生徒もたくさんいたのである。それなのに一部の生徒のがんばりを全てのもののように得意げに話したのであった。お母さんの切なる思いに応えられるような大したこともできていないくせに、さももったいぶってえらそうに、大事な時間を自分の満足のために使って発表した自分がほんとうに情けなかった。そのお母さんにあのおごった自分をあやまりたい気持ちで一杯になった。時間が押し迫り発言を希望する人がたくさんいる中で、また自分の気持ちを整理するために貴重な時間を使うことは許されないような気がした。しかし最後の最後まで迷ったがやはりあのお母さんに私は自分の今の情けなさを伝えたい、伝えておかなければ明日からの自分の取

り組みにうそやおごりが出るような気がした。そう思うのと同時にもう手が挙がっていた。幸い前列に座っていたため、司会者の方が今までずっと涙でぐちゃぐちゃになっていた私を気付いておられたのか、あるいは必死に手を挙げた私の形相に圧倒されてか、指名していただいた。板野中学校の生徒全部ががんばれているわけではないこと、差別解消への力を持たすことができないまま、部落問題に背を向けさせたまま卒業させた生徒がいたことを忘れたかのようにおこった発言をした自分が情けなくてしかたがないことを伝えた。そして一人の取りこぼしもなく、うつむく生徒もなく、みんなが部落問題を自分の問題としてきっちり捉えるためにはどうしたらいいかを考えたときに、部落出身であろうとなかろうと、人の生きる力をもぎ取って生きようとする、自分より下の存在を求めることで自分を安心させるような生き方、これらが差別を作り、残してきたことを、そして誰かを下に見ることによって自分の存在を確認するような生き方はしない、ということを生徒たちと一緒に考えていきたい、言った。あのお母さんの訴えに対する答えにはなっていなかったかもしれない、しかし今現在目の前にしている生徒たちへの私自身の姿勢は伝えておきたいと思った。

(7) 最後に

私は着実に峠に向かって歩いているのだろうか。ほんとうの闘いができているのだろうか、熱い思いだけに終わってしまっていないだろうか。この3年間の取り組みを振り返ったとき、いたらない自分の姿がさまざまな思いとともによみがえる。

全体学習で発言した生徒からマイクを返される時、そのマイクの熱さにまた胸を打たれる。立ち上がって発言するその思いの熱さを象徴するマイクの温もりを自分の手のひらに感じるとき、また歩き続けていける力が私の中にわき起こってくる。

決しておごらず、他人を批判することなく、その背景を考えられる私でいたい。生徒たちを変えてやろうなどというおごりは持たない。思い上がらない。

「今、私は輝けているか」こう自分に問い続け歩いていきたい。

※

※

※

1994年度、この先生たちと授業を公開し合い、全体学習を積み重ねてきた。この取り組みが始まってちょうど5年目であった。この先生方の部落解放に向けて自分をさらけ出す姿に、私は大きな力をもらっている。部落解放は人間解放、自己の解放という視点を明確につかんできた1年間の実践であった。

この「よろこび」第3号は、これからの人生のまさしく礎となっていくと思う。本当に欲張りすぎた冊子であるが、まだまだ載せたい授業も文章もある。せつかく載せることができた授業記録やその思い、本当に大切にしたいし、多くの人の心に届いていくようにこれからの実践や生き方を点検していきたいと思う。そして、真剣にこの「よろこび」第3号を読んでくれる人、共に部落解放の道を歩いていく人、そんな仲間を求めて、そんな仲間の広がり求めて全力で生きていきたい。この冊子に名前を書かせていただいた先生方、真摯に部落解放の授業に取り組んでくれた仲間、今まで出会った子どもたちに感謝しながらこれからも歩き続けたい。

1995年3月

徳島県板野郡板野中学校 教諭 森口健司